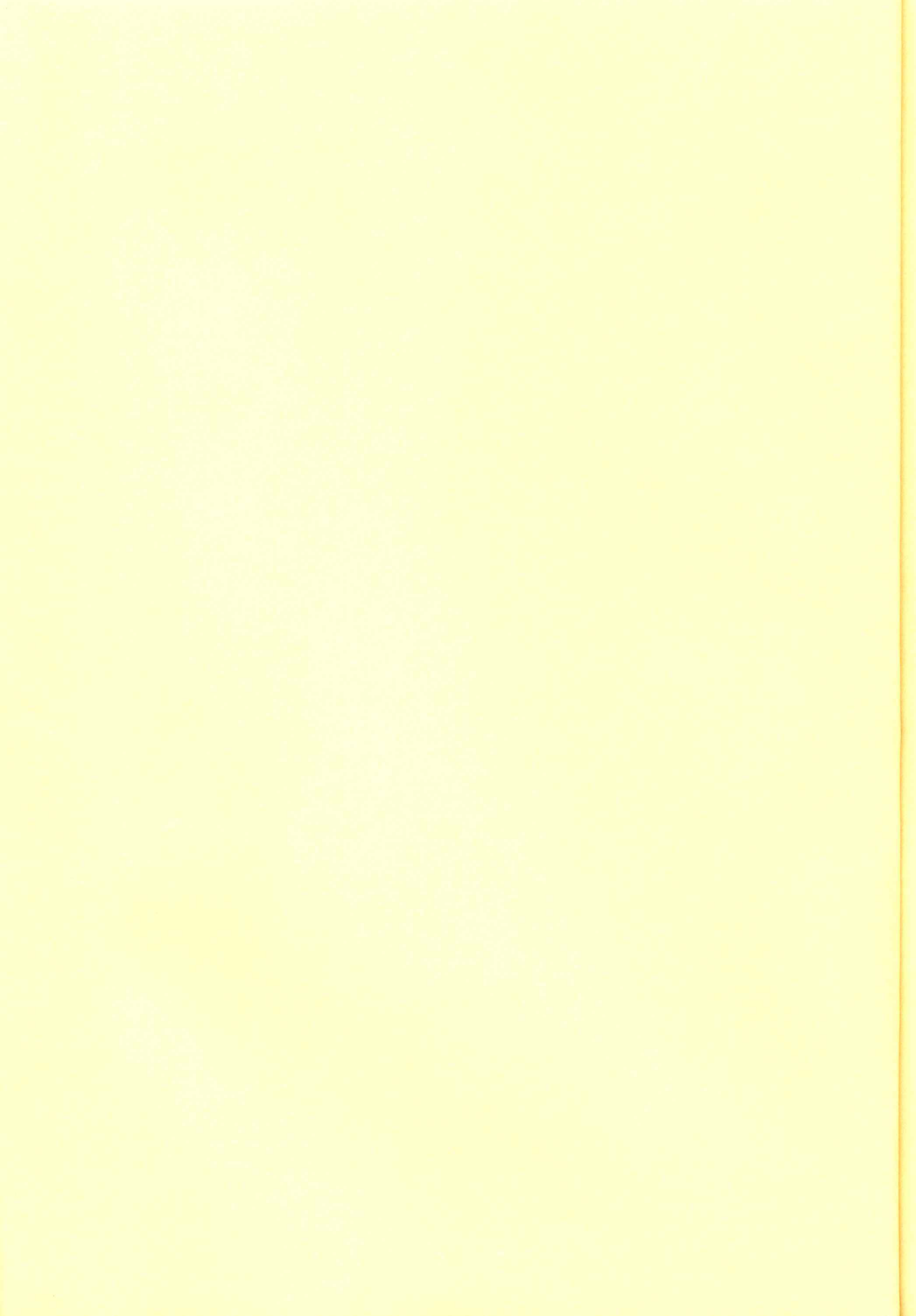


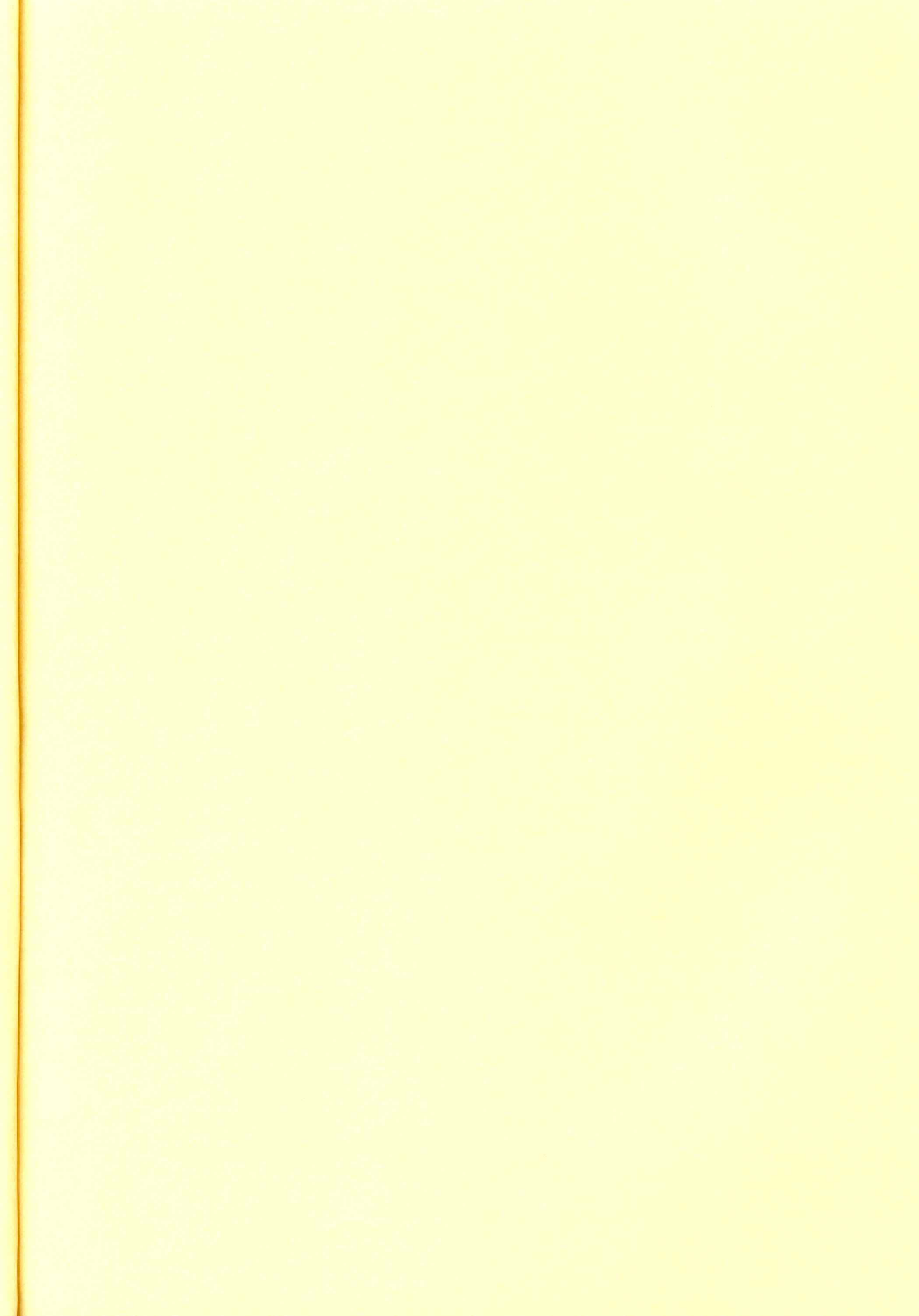
みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報

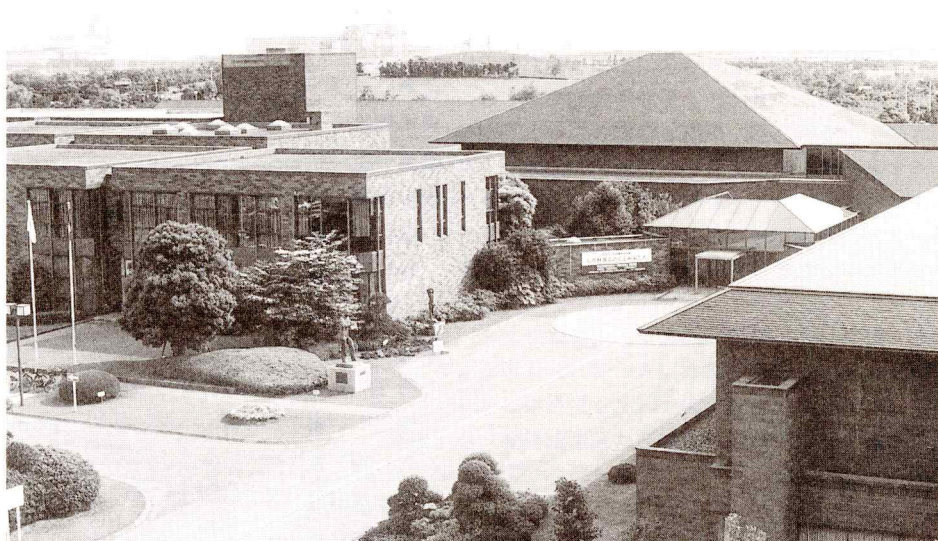
平成元年度

CHIBA PREFECTURAL MUSEUM OF ART









千葉県立美術館外観

目 次

ごあいさつ	1
美術館誌	2
事業一覧	3
展示事業	5
常設展	6
特別展	11
企画展	19
普及事業	25
教育普及	26
図書	34
刊行物一覧	38
学校巡回展	39
博物館実習	39
団体展	40
利用状況	44
資料貸出一覧	45
友の会	47
収集事業	48
収蔵資料	49
管理運営	51
機構	52
施設	54
沿革	54
平成2年度主要事業	55
平成2年度職員	56
利用案内	57

ごあいさつ

平成元年度における千葉県立美術館活動の実績を年報としてまとめました。

本館は、昭和49年の開館以来の運営方針であります“みる・かたる・つくる”を基本として、総合的に展開して、県民の要請にこたえるよう努めております。

本年度は、開館15周年を迎え、記念特別展として「房総と近代美術」を開催したほか、房総と関係の深い白樺派を中心とした「白樺派と近代美術」、あるいは房総ゆかりの作家「山本不二夫展」を開催し、その業績を顕彰するなど、地域に密着した美術館としての役割を果たすと同時に、国際的視野に立って、外国の優れた美術作品を鑑賞する機会として、「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」の開催、更には全国的な公募展として「第4回現代日本具象彫刻展」を実施しました。

一方、本館が収蔵する作品の展示については、一層の充実、強化に努め、常設展を2期にわたりテーマ別に開催するとともに、館外における移動美術館展も2地域で実施しました。

また、美術についての理解を深め、作品鑑賞の一助とするため、特別展、企画展に関連づけて美術講演会を開催するとともに、美術の各分野にわたる実技講座も、入門講座、研修講座、自主講座に分けて実施し、美術を語る会も実技を中心に構成するなど、増加の一途をたどる県民の美術創作への意欲に対応してまいりました。

さらに、本館が収蔵すべき作品の収集については、既に策定されている基本方針に基づき、作家や所蔵家の協力を得つつ、コレクションの体系化とその充実化を図りました。

今後とも、関係諸機関及び各団体並びに県民の皆様の御指導と御支援をお願いいたします。

平成2年4月

千葉県立美術館長

竹 内 一 雄

美 術 館 誌

- 4月1日 辞令交付・普及課新設
20日 特別展「房総と近代美術」(6月25日まで)
- 5月20日 第1回美術を語る会
27日 第1回美術講演会
- 6月24日 第2回美術を語る会
- 7月1日 常設収蔵作品展(I期、10月15日まで)
企画展「房総の美術家シリーズ19-山本不二夫展」(7月30日まで)
15日 第3回美術を語る会
25日 第1回美術館調査研究員会議
- 8月26日 第4回美術を語る会
- 9月9日 特別展「白樺派と近代美術」(10月15日まで)
16日 第5回美術を語る会
30日 第2回美術講演会
- 10月28日 第6回美術を語る会
- 11月1日 竹内館長と千葉県立美術館友の会が千葉県教育功労者表彰
16日 特別展「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」開催に伴い、デュッセルドルフ美術館ペータース館長来館
18日 特別展「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」(12月24日まで)
22日 第13回千葉県移動美術館(鎌ヶ谷市三橋記念館、12月4日まで)
25日 第7回美術を語る会
- 12月1日 学校巡回展(4高校 安房・安房農業・安房南・泉 3月20日まで)
2日 第8回美術を語る会
7日 第13回千葉県移動美術館(酒々井町中央公民館、12月14日まで)
9日 第3回美術講演会
- 1月5日 常設収蔵作品展(II期、3月31日まで)
20日 第9回美術を語る会
- 2月2日 企画展「第4回現代日本具象彫刻展」(2月25日まで)
10日 第10回美術を語る会
20日 第2回美術館調査研究員会議
- 3月5日 空調設備工事のため休館(3月31日まで)

平成元年度 事業一覧

太字は本館主催展

月	み	る	か	た	る	つ	く	る
4	第26回全日本総合書道大展覧会 第13回鳳聲会書作展 第59回郷陽会展 水彩展 特別展「房総と近代美術」 武蔵野美術大学校友会千葉県支部展 第16回千葉新協展 第9回千葉美術工芸展 第15回歩会彫刻展	4/11～16 4/18～23 4/18～23 4/18～23 4/20～6/25 4/25～30 4/25～30 4/25～5/7 4/25～5/7				陶芸① (9日間) ④デッサン① (3日間)		
5	第7回日中友好書道協会展 第20回表美展 第12回千葉展 第13回墨の県展 第29回千葉市アマチュア美術展 千葉中美展 第12回千葉一陽展 第15回猊展	5/2～14 5/2～7 5/9～14 5/16～21 5/23～28 5/23～28 5/30～6/4 5/30～6/4	美術を語る会(1) 5/20 美術講演会(1) 5/27			④洋画① (6日間) 洋画① (10日間)		
6	第36回千葉県書道協会展 第4回日本画四季展 第14回関東全展 千葉幼児美術展 第11回新槐樹社千葉県支部展 第12回精鋭展 第16回千虹会日本画展 明日を拓く教育美術展 第34回二科会千葉支部展 千葉二紀展	6/6～11 6/6～18 6/13～18 6/13～18 6/20～25 6/20～25 6/20～25 6/20～25 6/27～7/2 6/27～7/2	美術を語る会(2) 6/24			日本画 (10日間)		
7	企画展「山本不二夫展」 常設収蔵作品展Ⅰ 第17回水彩連盟千葉支部展 第69回習美会初夏大作展 第18回千葉市勤労者文化展 第33回千葉県小中学校書写展覧会 第21回千葉市水墨画同好会連合会展 第9回ちば産経現代洋画展 日本水彩画会第5回千葉県支部展	7/1～7/30 7/1～10/15 7/4～9 7/4～9 7/4～9 7/4～9 7/11～23 7/25～8/6 7/25～30	美術を語る会(3) 7/15			④洋画② (6日間) 彫刻 (10日間) ④陶芸 (5日間)		
8	第18回写真千葉県展 第22回千葉県高等学校合同写真展 第23回漱雲会全国書道展 第9回日本春秋書院千葉県書道連盟展 第12回千葉等迦展 第19回いてふ会彫刻展 第17回千葉市教職員美術展覧会 第10回龍峽書道会千葉県入展 第13回尽墨会書作展 第29回白扇書道会展	8/8～20 8/8～13 8/8～13 8/15～20 8/15～20 8/15～27 8/22～27 8/22～27 8/22～27 8/29～9/3	美術を語る会(4) 8/25			④デッサン② (3日間) ④書芸 (4日間) 洋画② (10日間)		
9	第19回新構造千葉支部展 特別展「白樺派と近代美術」 第14回葉美会展 第21回ファンシー洋画展 第12回千葉県写真展	9/5～10 9/9～10/15 9/12～17 9/12～17 9/12～24				④金工 (6日間)		

月	み	る	か	た	る	つ	く	る
9	第27回新世紀美術協会千葉支部展 第39回千葉デザイン展 第36回千葉県勤労者美術展 第5回日本書道学会千葉県連展 第32回千葉市小中養護学校 児童生徒作品総合展	$\frac{9}{12} \sim 17$ $\frac{9}{19} \sim 24$ $\frac{9}{19} \sim 24$ $\frac{9}{19} \sim 24$ $\frac{9}{26} \sim 10$	美術を語る会(5)	$\frac{9}{16}$		㊦日本画 書芸①	(7日間) (3日間)	
10	第9回二科会写真部千葉支部展 第21回千葉現展 ダネラ・デコパージュ展覧会 千字会書道展 第16回文化書道千葉県連合会公募展覧会 秋耕会千葉支部展 第41回千葉県美術展覧会(県展)	$\frac{10}{3} \sim 8$ $\frac{10}{3} \sim 8$ $\frac{10}{3} \sim 8$ $\frac{10}{10} \sim 15$ $\frac{10}{10} \sim 15$ $\frac{10}{10} \sim 15$ $\frac{10}{21} \sim \frac{10}{12}$				陶芸② 金工	(9日間) (12日間)	
11	千葉県高等学校総合芸術祭 美術・工芸・書道作品展 特別展「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」 第13回千葉県移動美術館(鎌ヶ谷市) 第34回子ども県展 (千葉県児童生徒美術展覧会)	$\frac{11}{15} \sim \frac{11}{26}$ $\frac{11}{18} \sim \frac{11}{24}$ $\frac{11}{22} \sim \frac{11}{4}$ $\frac{11}{28} \sim \frac{11}{10}$				㊦彫塑 ㊦版画	(7日間) (7日間)	
12	第13回千葉県移動美術館(酒々井町) 第7回明るい社会づくり ポスターコンクール展覧会 今日の美術を考える会展 常設収蔵作品展Ⅱ	$\frac{12}{7} \sim \frac{12}{19}$ $\frac{12}{12} \sim 17$ $\frac{12}{12} \sim 24$ $\frac{12}{14} \sim \frac{12}{4}$	美術を語る会(8) 美術講演会(3)	$\frac{12}{2}$ $\frac{12}{9}$		書芸② ㊦洋画③ ㊦てん刻	(3日間) (6日間) (3日間)	
1	第25回登龍社宮坂会書初展 第1回全国童謡書道展 第19回千葉県大学美術連盟展 橘華書道展 第17回富士百景写真展 第11回親子絵画展 第17回現代書壇代表展・現代書壇巨匠展 千葉県書壇秀抜展・千葉書壇新進展 千葉市観光絵画と写真コンクール作品展 第7回県医展(千葉県医師会美術展) 第23回千葉県老人クラブ会員作品展 第23回千葉大学学生書道展 千葉大学教育学部美術科卒業制作展 群鷗書人展 第5回書星選抜展 第42回千葉県小中高校書初展覧会 千葉市小中養護学校児童生徒書写展覧会	$\frac{1}{5} \sim 11$ $\frac{1}{5} \sim 11$ $\frac{1}{5} \sim 11$ $\frac{1}{5} \sim 11$ $\frac{1}{6} \sim 15$ $\frac{1}{9} \sim 15$ $\frac{1}{16} \sim 21$ $\frac{1}{23} \sim 28$ $\frac{1}{23} \sim 28$ $\frac{1}{23} \sim 28$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$ $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{4}$				版画 洋画③	(12日間) (10日間)	
2	企画展「第4回現代日本具象彫刻展」 第21回千葉市民美術展覧会(市展) 第15回千葉県民写真展 幕張北高校書道コース卒業制作展 和洋女子大学卒業展(雁鴻会書道展) 第13回唱和会書展 第11回千葉藍笥会かな書作展 第37回書星教育部展 第15回子ども造形展	$\frac{2}{6} \sim 25$ $\frac{2}{6} \sim 25$ $\frac{2}{14} \sim 25$ $\frac{2}{14} \sim 18$ $\frac{2}{20} \sim 25$ $\frac{2}{27} \sim \frac{2}{4}$ $\frac{2}{27} \sim \frac{2}{4}$ $\frac{2}{27} \sim \frac{2}{4}$ $\frac{2}{27} \sim \frac{2}{4}$	美術を語る会(10)	$\frac{2}{10}$		自主研修講座 デッサン	(16日間)	
3	臨時休館							

展 示 事 業

常設収蔵作品展を2期に分けて開催し、特に浅井忠の作品資料は常時展示した。

特別展としては、「房総と近代美術」「白樺派と近代美術」「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」を開催した。

企画展としては、「房総の美術家シリーズ19－山本不二夫展」「第4回現代日本具象彫刻展」を開催したほか、「第13回千葉県移動美術館展」を三橋記念館と酒々井町中央公民館において開催した。

常 設 展

常設 収蔵作品展（第Ⅰ期）

今年度常設収蔵作品展第Ⅰ期は、3コーナーに分けて展示した。「動物の表現」では、日本画、洋画、版画、工芸、彫刻の各分野の作家によって表現された「動物」の魅力を、「素描」では、各作家の制作を支える発想や表現の源泉を知る貴重な資料の数々を、「新収蔵作品」では、高村光太郎の彫刻作品を、会期中、前期と後期に分けて紹介した。

会期（前期） 平成元年 7月1日(土)～30日(日)

〃（後期） 〃 8月1日(火)～10月15日(日) 92日間

展 示 点 数 162点

入 場 者 数 45,026人

出 品 目 録

「動物の表現」

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
<日 本 画>			
浅 井 忠	※盗 賊	板 倉 鼎	金 冬 魚
〃	※亀 の 図	桜 田 精 一	冬 の 並 木 道
〃	※虎 の 図	宮 城 泰 介	平 絵 馬 に よ る
石 井 林 響	※白 閑 鳥	篠 崎 輝 夫	絵 I N S E C T S
〃	※梅 花 小 禽 武	〃	B I R D S
〃	※蘇 花 小 禽 武	羽 生 智 樹	動 く 気 配 の 鳥
富 取 風 堂	※游 鯉 (其一)		
〃	※游 鯉 (其二)		
〃	※厩 舎 猿 ぜ い 趣		
〃	※親 子 こ れ	<工 芸>	
椿 貞 雄	お か	浅 井 忠	菓 子 器
〃	秋	〃	茶 器 (猿蟹合戦図)
島 多 訥 郎	※	香 取 秀 真 夫	鳩 香 炬 色
吉 岡 堅 二	※	津 田 信 夫	変 貌 七 遊 目
立 石 春 美		〃	胡 孫 鴨
渡 辺 巴 学		〃	子 迷 家 鴨
岩 崎 敏 男	關 原	〃	月 下 妖 麗 物
松 尾 敏 男	原	會 田 富 康 喬	青 銅 双 鳥 置 皿
		大須賀	昆 蟲 文 飾 皿
<洋 画>			
トロワイヨン	河 辺 の 道	<版 画>	
ミ レ ー	垣根に沿って草を食む羊	浜 口 陽 三	う さ ぎ
ク ー ル ベ	雪 の 中 の 小 鹿	〃	二 匹 の て ん と う 虫
浅 井 忠	あ ひ る	〃	二 匹 の 蝶
鶴 田 吾 郎	蒙 古 の 女		
〃	憶 ひ 出 の 広 安 門		
〃	朝 日 連 峰		
石 橋 武 治	水 温		
椿 貞 雄	鴨 図		
安 藤 信 哉	牧 歌		
鳩 川 誠 一	野 の 花		
		「新収蔵作品」	
		彫 刻	
		高 村 光太郎	薄 命 児 男 子 頭 部
		〃	〃

※印は前期のみ展示

作家名	作品名
高村 光太郎	裸婦座像
"	手
"	大倉喜八郎の首
"	野兎の首
"	十和田裸婦像のための「手」
"	十和田裸婦像のための中型

「素描」

浅井 忠	※風景 (一)
"	※風景 (二)
"	※平城大仏鐘楼
"	※西洋婦人
"	※玉川
"	※民家 A
"	※はたらく婦人
"	※樹 I
"	※樹 II
中林 儼	保津川上流景
"	風
柳 敬助	※デッサン (ポーズする裸婦) 1
"	デッサン (腰かける裸婦)
"	デッサン (母子像)
田中 志奈子	デッサン (神官)
"	デッサン (大原女)
"	デッサン (箒を持つ女)
田中 善之助	高台寺
"	出町
安井 曾太郎	デッサン (裸婦)
"	デッサン (裸婦)
"	デッサン (裸婦)
"	※デッサン (裸婦)
"	※デッサン (少女)
"	※デッサン (人形を持つ少女)
原 勝郎	デッサン (C)
"	デッサン (D)
"	デッサン (F)
"	デッサン (G)
"	※デッサン (H)
"	デッサン (K)
"	デッサン (L)
鶴田 吾郎	網うつ男
"	あくび
"	中山競馬場
"	※自画像
"	※女の横顔
"	※婦人像
"	水汲み
"	済州島にて

作家名	作品名
鶴田 吾郎	廟と老人
"	十和田の宿
"	練習中の大交響楽団
"	芋掘り
"	大島
須田 国太郎	デッサン (膝に腕を置く裸婦)
"	※デッサン (水辺風景)
"	デッサン (能舞台)
"	※デッサン (腰かける裸婦)
"	デッサン (民家)
中西 利雄	マドマ・ゼル H (A)
"	帽子をかぶった女
"	T嬢
"	長崎にて

※印は前期のみ展示

後期追加展示

「動物の表現」

<日本画>

黒沼 槐山	花鳥図
浅井 忠	羊の図
"	猿の図
"	さぎの図
"	鷹の図
石井 林響	松竹に鴉
"	花鳥
"	嵐
富取 風堂	夕
"	河
"	群魚
若木 山	池の春

<彫刻>

鈴木 章	七面鳥
柳原 義達	風の中の鴉
鈴木 徹	馬と娘の恋物語 (3部作・秋・冬・早春)
浦野 八重子	生きるということ

<工芸>

香取 秀真	霊獣文大花瓶
津田 信夫	北辺夜猫子
"	狸
"	鯰
"	蜻蛉耳花生
"	水生
"	虎

常設 収蔵作品展（第Ⅱ期）

今年度常設収蔵作品展第Ⅱ期は、2つのコーナーに分けて展示した。「花の表現」では、日本画、洋画、工芸の各分野の作家によって表現された花の魅力を紹介した。また昨年度及び今年度に基金で取得した作品と、同作家の既に収蔵されている作品を併せて特別展示した。

会 期 平成2年1月5日(金)～27日(土) 20日間
 展示点数 100点
 入場者数 9,533人

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
日 本 語			
浅 井 忠	梅	榎 本 了 三	花
"	蓮 と 蘭 の 図	遠 藤 健 郎	朝
"	も ろ こ し と 鳳 仙 花	大 下 藤 次 郎	紫
石 井 林 響	梅 花 小 書	岸 畑 久 吉	壺
"	梅 花	黒 田 重 太 郎	女 と 小
"	春	小 堀 進 次	花 と
"	桜 花	"	芭 菖
"	竹 秋	桜 井 忠 剛	花 バ
鳥 多 訥 郎	秋 溪	澤 部 清 五 郎	桜 鶯
田 岡 春 徑	山 茶 花	白 滝 幾 之 助	
椿 貞 雄	夕 洋	椿 貞 雄	春 夏 秋 冬 図 屏 風 (春)
富 取 風 堂	"	"	墨 壺 に 椿 一 輪
"	"	鶴 田 吾 郎	千 川 堤 の 桜
"	花	"	小 鳥 た ち
"	花 初	中 西 利 雄 一	外 房 風 景 門
"	花 の	"	長 も り の あ ん ず
"	雨 鳥	"	あ も り の 花
若 木 山	牡 牡	"	ひ ま わ り
渡 辺 阿 以 湖		"	ラ イ ラ ッ ク と 蝶
洋 画		真 野 紀 太 郎	バ 草 日 葵
浅 井 忠	つ ば き の 図	水 野 以 文 二	向 菊
"	京 都 高 等 工 芸 学 校 の 庭	"	
浅 井 真	梅	工 芸	
"	四 月 の	浅 井 忠	図 案 皿 “梅”
"	山 百	"	向 付 皿 “百合”
"	け 梅	秋 山 逸 生	蕾 芝 山 象 嵌 額
"	シ ク ラ メ	"	カ ナ 芝 山 象 嵌 襟 飾
"	赤 軸 の	大 須 賀 喬 真	蝶 文 黒 銅 香 炉
荒 谷 直 之 介	大 原 蓮	香 取 秀 紀	菊 文 鉄 釜
安 藤 信 哉	静 金	神 谷 紀	鉄 絵 銅 彩 あ や め 紋 大 鉢
板 倉 鼎	金 ダ	"	鉄 絵 銅 彩 椿 紋 壺
伊 藤 快 彦	リ	信 田 洋 平	銀 壺 (花 ひらく)
		藤 田 喬 平	飾 宮 ・ し だ れ 桜

作家名

作品名

図案

浅井 忠

〃
〃
〃
〃
〃

鉢
花
木
花
菊

の
ラ
の
か
げ
の
瓶
2

図
花
木
女
種
花

特別展示

フォンタネージ

〃
〃
〃
〃
〃
〃

水
木
池
牛
森
風
風

汲
と
を
の

み
追
空
地
景
景

場
樹
う
の
農
婦
1
2

景
立
木
婦
婦
1
2

作家名

作品名

フォンタネージ

浅井 忠

〃

コロ

〃

ミレ

〃

クル

〃

トロワイヨン

高村 光太郎

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

神女之図

フォンテンプローの夕景

農婦

ナポリ近郊の思い出

フォンテンプローの風景

垣根に沿って草を食む羊

雪の中の小鹿

眠る人

河辺の道

薄命児男

猪頭部

裸婦座像

手

大倉喜八郎の首

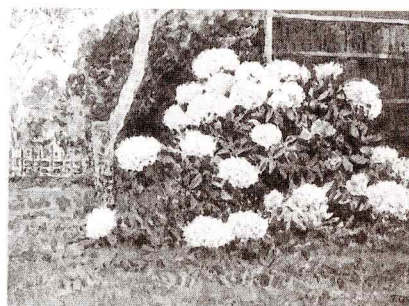
野兎の首

十和田裸婦像のための「手」

十和田裸婦像のための中型



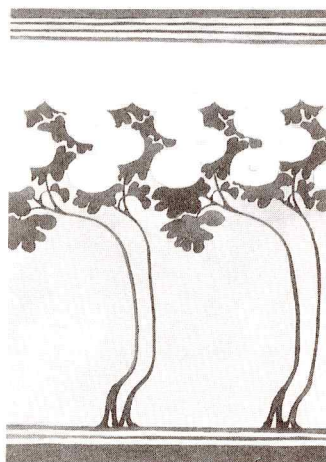
富取風堂「花籠」



大下藤次郎「紫陽花」



桜井忠剛「バラ」



浅井 忠「花木」

特 別 展

—千葉県立美術館開館15周年記念特別展—

房総と近代美術

会 期 平成元年 4月20日(木)～ 6月25日(日)

展示点数 216点

入場者数 14,676人

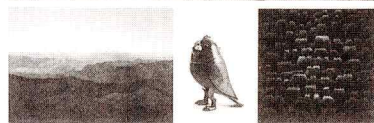
千葉県立美術館は、昭和49年10月23日に開館し、「みる・かたる・つくる」をモットーに総合的で調和のとれた美術館活動を目標とし、近代美術館及び地域美術館としての役割をふまえた活動を行い、このほど15周年を迎えることとなった。その記念事業として、また、併せて昭和58年9月、千葉県の人口が500万人を突破したのを記念して制定された「県民の日」記念事業として実施した。

本展では、15年の間に収蔵した作品（日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画等）を「浅井忠と関係作家の作品」「浅井忠と水彩画の流れ」「房総をモチーフに描いた作品」「房総ゆかりの美術家の作品」のテーマにより展示し、房総と近代美術のかかわりをひろく紹介した。



房総と近代美術

1989年4月20日～6月25日



出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
浅井忠と関係作家の作品			
ミ レ ー	垣根に沿って草を食む羊	浅 井 忠	婦 人 像
コ ロ ー	フォンテンブローの風景	松 岡 寿	と 小 川 像
〃	ナポリ近郊の思い出	和田 英作	塚 本 靖 風
ディ ア ズ	森 中 の 農 婦	石 井 柏 亭 次	信 州 風
トロワイヨン	河 辺 の 道	牧 野 克 彦	松 林 檜
デュブレ	夕 暮 れ	伊 藤 快 剛	林 バ
ルソー(テオドル)	バルビゾン の 農 場	桜 井 忠 喜	洛 北 の 早 春
ジャック	森 の 中	都 鳥 英 僊	け し の 花
ドービニー	ヴァルモンドワの小川	中 林 源之助	秋 の 山 (大和初瀬村)
クー ル ベ	眠 る 人	加 藤 千 襲	港
〃	雪 中 の 小 鹿	小 柳 一 広	南 仏 風 景
フォンタネージ	牛を追う農婦のいる風景	榊 原 良 雄	晩 仏 国 ト ル ド ン ヌ
〃	木 立	国 松 桂 溪	ハドソン河の朝 靄
〃	池 と 樹 木	澤 部 清 五 郎	緑 の ス ウ ェ ー タ
〃	神 女 之 図	霜 鳥 之 彦	田 園 風 景
〃	風 景 1	間 部 時 雄	保 津 峡
〃	風 景 2	西 川 純	浴 後 近 所
ローラン ス	カルカッソンの幽閑者の解放	黒 田 重 太 郎	熱 海 附 近
コ ラ ン	田 園 詩	安 井 曾 太 郎	竹 窓 読 書
浅 井 忠	藁 屋 根	梅 原 龍 三 郎	皇 居
〃	フォンテンブローの夕景	〃	パ リ の 女
〃	グ レ ー の 洗 濯 場	田 中 善之助	一 ニ ュ に
〃	グ レ ー の 秋	足 立 源 一 郎	梅 林
〃	グ レ ー の 柳	浅 井 真	
〃	老 母 像	田 中 志 奈 子	デッサン (棒をもつ裸体)

作 家 名	作 品 名
田 中 志奈子	デ ッ サ ン (裸体)
安 井 曾太郎	デ ッ サ ン (裸婦)
"	デ ッ サ ン (裸婦)
"	デ ッ サ ン (裸婦)
田 中 善之助	デ ッ サ ン (高台寺)
"	デ ッ サ ン (出町)
足 立 源一郎	下 加 茂 森
"	あ は 田
浅 井 忠	鍛 冶 橋
"	曳 舟 通 り
"	磬 梯 山 の 図

浅井 忠と水彩画の流れ

浅 井 忠	沢 入 駅
"	金 州 城 壁 上
"	フ ォ ン テ ン ブ ロ ー の 森
"	男 性 裸 像
"	グ レ ー の 橋
"	洋 上 の 夕 陽
"	京 都 高 等 工 芸 学 校 の 庭
"	奈 良 郊 外 景
ワ ー グ マ ン	松 島 風 景 光
五 百 城 文 哉	日 竹 林 図
河 合 新 蔵	山 海 岸 風 景
丸 下 藤 次 郎	大 紫 陽 花
石 川 欽 一 郎	赤 城 淡 煙
真 野 紀 太 郎	バ 伊 国 ア シ
白 滝 幾 之 助	伊 小 諸 城 址
三 宅 克 己	井 柏 亭 次
石 井 周 彦	小 山 直 彦
小 相 田 直 泰	相 城 泰 舒
赤 水 野 以 文	須 田 国 太 郎
後 藤 工 志	古 賀 春 利
中 西 破 章	不 田 通 雄
富 荒 谷 直 之 介	小 堀 心 澄
無 縁 寺 橋 弟 治	三 橋 弟 治

房総をモチーフに描いた作品

浅 井 忠	印 旛 沼
"	房 州 波 太 村
"	房 州 白 浜 村
"	房 州 白 浜 村

作 家 名	作 品 名
浅 井 忠	房 州 乙 浜 村
"	白 浜 風 景
青 木 繁 亭	(重文) 海 の 幸
石 井 柏 亭	真 間 の 入 江 (下図)
"	印 旛 沼
"	佐 原
小 山 周 次	銚 子 犬 吠 埼
大 久 保 作 次 郎	丘 上 の 鐘 楼
石 橋 武 治 堂	白 鷺 の い る 風 景
富 取 利 彦	朝 房 州 伊 豫 ヶ 岳
鱸 林 俊 衛 雄	岩 和 田 海 岸
椿 田 眞 雄	鋸 山 か ら 見 た 房 総 半 島
三 田 通 雄	富 小 堀 岡 堅 二
吉 岡 堅 二	"
岩 崎 巴 人	波 濤 岩 礁 図
東 山 夷 山	若 木 政 明 学
寺 田 政 明 学	渡 辺 学
	波 濤 岩 礁 図
	残 波 上 海 女 図
	犬 吠 灯 台 の 見 え る 外 川 港 口

房総ゆかりの美術家の作品

日 本 画	図 像
鈴 木 鷺 湖	農 耕 の 図
石 井 鼎 湖	立 姿 婦 人 耶 姫
石 井 林 風	葛 西 風 波
富 取 多 尾	群 夕 魚 茶
横 時 酒 東	若 小 野 具
大 岩 関 松 後	尾 藤
	農 母 の 肖 像
	西 村 房 太 郎 像
	婦 静 聖 フ ラ ン チ ェ ス コ 寺 院

洋 画

浅 井 忠	農 母 の 肖 像
"	西 村 房 太 郎 像
堀 都 柳 石	柳 井 柏 亭

作家名

原 勝 郎
石 橋 武 治
椿 貞 雄
鳩 川 誠 一
安 藤 信 哉
板 倉 鼎
円 寺 昇
内 藤 聿
山 本 夫
笹 岡 了 一

作品名

モ シ マ ル ト ル
窓 辺 の 少 女
八 重 子 像
パ リ の 窓
裸 岩 婦 人 像
緑 衣 の 婦 人 像
ハ イ デ ル ベ ル グ 風 景
放 蕩 息 子 の 帰 宅

作家名

帖 佐 美 行
蓮 田 修 吾 郎
鈴 木 治 平
宮 之 原 謙
土 肥 刀 泉
山 本 正 年
増 村 益 城
藤 田 喬 平
青 木 滋 芳
秋 山 逸 生

作品名

香実と想鳥(集いの為の酒器セット)
黄銅浮彫「鐘がなるリュベック」
湿 原 の 詩
象 嵌 磁 鉢
釉 彩 両 耳 花 瓶
瑞 漆 波 文 溜 塗 盛 器
乾 漆 宮 じ だ れ 櫻
飾 黒 蝶 貝 象 嵌 箱

彫 刻

小 倉 惣 次 郎
" 天 光
藤 野 須 賀 川 義 達 良 武 衛 恭 太 郎 男 実 道
大 長 谷 原 藤 越 野 川 村 司 木 本 正
柳 佐 舟 神 堀 木 郡 鈴 山

伊 藤 博 文 像
明 治 天 皇 像
希 も た れ 望
安 風 の 中 の 息
ラ 婦 ツ プ 鴉 帽
聖 な る 佇 立
う ご め く ル ソー VI
詩 人 の す る 像
存 エ ト ル リ ア の 私 壺

書

鱸 井 松 塘
石 見 雙 石
浅 大 喜 舟
高 沢 隆 子
小 沢 南 総
千 代 倉 桜 風
中 村 象 舟
鈴 木 方 閣
金 子 聴 鶴
浅 見 錦 松
種 谷 扇 龍 舟

題 山 陽 先 生 遺 像 詩
林 鳥 相 忘 不 避 人
崔 子 玉 座 右 銘
待 桃 李 争 妍
天 齋 藤 茂 吉 風
齋 泉 千 桎 の 和 歌
古 万 思 の 歌
視 良 寛 之 山 昌
故 郷 之 山 明 詩 河

工 芸

香 取 秀 真
" 信 夫
津 田 信 夫
" 谷
鹿 島 一 彦
香 取 正 康
会 田 富 喬
大 須 賀 洋
信 田 四 郎
関 谷 郎

靈 獸 文 大 花 瓶
笑 獅 子 香 炉
鳩 點 玲 瓏 炉
一 鳳 翔 薰 猫 子
北 辺 夜 猫 子
布 目 嵌 菱 つ な ぎ 文 南 録 水 指
龍 銀 玉 錯 花 銅 瓶
蓋 の あ る 青 銅 壺
蝶 文 黒 銅 香 炉
黄 銅 鉄 鉢 ず 壺

版 画

浜 口 陽 三
" 一
" 襄
星 襄 一
" 治
牛 玖 健 治
" 雄
深 沢 幸 夫
" 寿
池 田 満 九
瑛 九

バ リ の 屋 根
う い き よ う
ポ プ ギ ン ぼ と 青 い 鉢
さ く ら の (林) 樹
王 陽 (発 芽)
作 品 え ん ち
ゆ う (メ ヒ コ) A
影 の 中 の 影
掌 の 中 の I
S o m e t h i n g の 告
シ ン デ レ ラ の 目
林 の 円



白樺派と近代美術

会 期 平成元年 9 月 9 日(土)～10月15日(日)

32日間

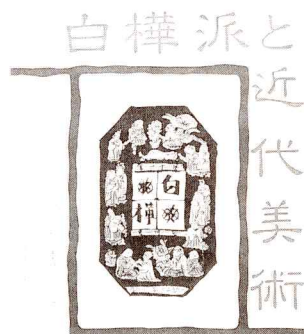
展示点数 197点

入場者数 8,075人

明治末から大正期にかけて、武者小路実篤、志賀直哉らは雑誌「白樺」を発行し、当時の文芸界に新風を送り込んだ。特に同誌は文芸雑誌であるとともに美術雑誌でもあり、同誌を通じて西洋美術の紹介が盛んに行われ、近代日本美術の発展に大きな影響を与えた。また、美術展覧会を開催するなど、美術普及における白樺派の幅広い活動とその功績は、特筆すべきものがあった。

白樺派は、また、本県との関わりも深く、大正期に武者小路実篤や志賀直哉、柳宗悦、バーナード・リーチなどが我孫子に居住し、多くの文人との交流がこの地を舞台に展開されるなど、白樺派の隆盛時代を築いている。

本展では、白樺派同人及び関連作家の作品や「白樺」が紹介したセザンヌ、ロダンをはじめ印象派、後期印象派、さらには20世紀美術に至る海外の巨匠の作品を併せて展覧した。



平成元年九月九日土～十月十五日日

千葉県美術館

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
ミ レ ー	垣根に沿って草を食む羊	ロ ダ ン	永 遠 の 青 春
コ ロ ー	ナポリ近郊の思い出	〃	痙攣する大きな手
ク ー ル ベ	眠 る 人	〃	小さなスフィンクス
〃	雪 の 中 の 小 鹿	南 薫 造	英 国 農 夫 の 顔
セ ザ ン ヌ	草 上 の 昼 食	〃	小 キリスト誕生礼拝之図
〃	二 つ の 果 実	河 野 通 勢	自 画 像
〃	麦 わら 帽子 の 少 女	〃	自 画 像
〃	風 景	〃	風 景(裾花)
ゴ ッ ホ	じゃがいもの皮をむく女	〃	河 柳(裾花)
〃	収 穫	〃	巖
〃	は ね 橋	〃	自 画 像
〃	石垣のある田園風景	山 脇 信 徳	夕 日
〃	アルルのカフェ	〃	雨 の 夕 べ
ゴ ー ギ ャ ン	乾 草	〃	雨 霰 の 山 の 雪
ル ノ ア ー ル	マ ル チ ッ ク	〃	樟 樹
〃	ガ ブ リ エ ル	高 村 智 恵 子	婦 人 の 像
モ ネ	ヴェトゥーユのセーヌ川	有 島 生 馬	婦 人 の 像
〃	ジヴェルニーの草原	〃	黒 衣 の 女
ド ガ	浴 槽 の 裸 婦	斎 藤 与 里	婦 人 像
ピ サ ロ	風 景	〃	婦 人 像
ル ド ン	ア ン ド ロ メ ダ	梅原良三郎(龍三郎)	南 仏 風 景
ル ソ ー	モンスリー公園の眺め	〃	横 臥 裸 婦
ム シ ン ク	マ ド ン ナ	〃	父 の 像
〃	罪	〃	ノ ー ト ル ダ ム
ロ ダ ン	巴里ゴロッキの首	〃	ナ ル シ ス
〃	或る小さき影	白 滝 幾之助	某 師 の 像
〃	マダム・ロダン	〃	エ ジ プ ト
〃	打ちひしがれたカリアティッド	〃	伊 国 ア シ シ
〃	ウスタッシュ・ド・サンビエールの頭像	〃	伊 国 ナ ポ リ

作家名	作品名
湯浅一郎	パリのアトリエにて
"	裸婦
坂本繁郎	海岸の家
藤島武二	花籠
山下新太郎	読書
柳敬助	花澤莊肖像
"	静物
"	渡辺由太郎肖像
中村彝	雄子の静物
橋本邦助	背面裸婦
"	凝視
浜田葆光	奈良の筑地風景
"	アプトの村
椿貞雄	自画像
"	八重子像
"	横堀角次郎兄像
"	静物
"	窓外斎日像
岸田劉生	自画像
"	武者小路実篤像
"	椿君に贈る自画像
"	自画像
"	道路と土手と堀(切通之写生)
"	赤土と草
"	壺の上に林檎が載っている
"	麗子五歳之像
"	路傍初夏
"	画家の妻
"	画家三十歳之自画像
"	麗子洋装之像
"	天地の乱気……
中島正貴	作左山
清宮孤雁	静物
戸張	男の胴
"	立てる女像
"	老母寿
"	煌めく嫉妬
萩原守衛	女の胴
"	女手
毛利教武	クレオパトラとカルミニオン
"	丈髪像
"	裸婦座像
高村光太郎	手
"	大倉喜八郎の首
"	白掛彫絵湯呑
バーナード・リーチ	楽焼大皿兎鉢
"	赤絵丸文鉢
"	染付皿(彫絵)樹下婦人
"	衝立・鉄金具付
"	ガレナ釉家型置物

作家名	作品名
バーナード・リーチ	壺
"	自画像 26歳
"	手賀沼
"	樹小さな檜
宮本憲吉	楽焼草花模様蓋付壺
"	青磁水滴
"	白磁陽刻葉模様鉢
"	土焼鉄描すすき模様鉢
"	磁器染付おしどり模様食籠
武者小路実篤	ねぎ坊主
"	夫人像
"	自画像
"	婦人像
"	柿
"	この道より我を生かす道なし
"	富士山山頂
"	山城山
"	仏像 図
"	マ イ ヨー ル
"	美をつくる者
"	日日是好日
"	手
児島喜久雄	ばら像
"	若丸の像
"	椿
"	大観の胸像
千家元磨	あじさいと猫
長与善郎	草履
"	枇杷
"	文楽間
里見弴	樹
"	朝夕
"	玄人素人
"	大道無門
"	白居易の詩像
白居	居易の詩像
自画	像
資料名	資料名
作家名	資料名
有島武郎	志賀直哉宛書簡(大正3.1.25)
有島壬生馬	『白樺』明治43・5
"	書「石被水」1957年
"	書「暫喜逢飲会…」1949年
"	書「王維輞川詩」
"	志賀直哉宛絵葉書(明治42.9.28消印)
梅原龍三郎	武者小路実篤宛書簡(昭和11.5.27)
"	「浅井忠」原稿
"	志賀直哉宛書簡(昭和27.7.22)
"	「成四像」ブロンズ
"	「牛」ブロンズ
"	書「天女散華」1977年

作家名	資 料 名
木下 利玄	志賀直哉宛書簡(明治38, 4, 1)
"	武者小路実篤宛葉書(大正7, 12, 3)
郡 虎彦	志賀直哉宛葉書(明治43, 4, 26)
千家 元麿	武者小路実篤宛葉書(大正7)
児島喜久雄	志賀直哉宛葉書(大正7, 1, 22)
里見 弴	志賀直哉宛書簡(明治44, 4, 15)
"	『白樺』明治43, 11月ロゲン号
"	書「芸」
"	『本音』志賀直哉装幀(14, 6 小山書店刊)
志賀 直哉	武者小路実篤宛書簡(大正7, 12, 2)
"	「堀端の住ひ」原稿
"	梅原龍三郎宛書簡(昭和3, 2, 15)
"	『枇杷の花』題簽 梅原龍三郎(昭和44, 3)
"	「序」原稿
高村光太郎	長田秀雄宛葉書(明治43, 8, 10消印)
"	小澤佐助宛書簡(大正15)
"	長田秀雄宛書簡(明治43, 10, 10)
長与 善郎	志賀直哉宛(明治44, 4, 19)
"	書「おなじ海に生きるなら」
"	武者小路実篤宛葉書(大正7, 12, 7)

作家名	資 料 名
武者小路実篤	「お目出たき人」原稿
"	志賀直哉宛書簡(大正1, 12, 9)
"	志賀直哉宛書簡(大正9)
"	「モリエールの孤客について」原稿
"	『彼れの青春時代』装幀劉生(大正12, 2 敬文閣)
"	画帖「群妙集」
柳 宗悦	志賀直哉書簡(明治44, 8, 10)
"	武者小路実篤宛葉書(昭和25, 10, 29)
山脇 信徳	志賀直哉宛葉書(明治44, 11, 17消印)
"	『白樺』明治44, 9
岸田 劉生	「白樺十周年記念集」表紙絵(大正8)
"	武者小路実篤宛書簡(大正8, 9, 8)
"	「茶碗」
"	「童女棒寿」1923年淡彩
"	「表紙絵下絵」水彩
"	『劉生画集』芸術観(大正9, 12 聚英閣)
"	志賀直哉宛葉書(大正6, 12, 19)
"	「手」ブロンズ
"	「麗子立像」丹絵



ドイツ・ロマン派19世紀絵画展

ーフリードリヒからベックリンまでー

会 期 平成元年11月18日(土)～12月24日(日)
32日間
展示点数 115点
入場者数 9,101人

18世紀末、古典主義に対する一つの反動としてロマン主義が起こり、19世紀前半にわたって欧州諸国に広がった。

ロマン主義は、ドイツにおいては風景画を中心として、敬虔で内省的な独自のスタイルを築きあげた。

この展覧会では1913年に開設されたドイツの代表的美術館のひとつデュッセルドルフ美術館の所蔵品を中心に、ドイツの黄金時代といわれる19世紀絵画、特にドイツ・ロマン派を代表するフリードリヒ、ルンゲ、ベックリンをはじめ、ナザレ派など53作家の作品により、その足跡をたどった。

出 品 目 録

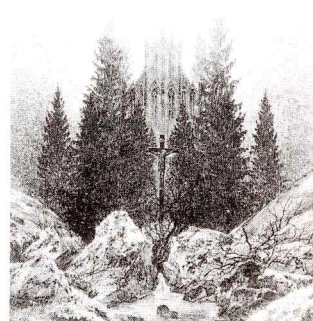
作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
ベン デ マ ン	二人の少女	シ ル マ ー	チヴィテラの眺め
カーロスフェルト	エジプトへの逃避	〃	糸杉
コルネリウス	5人の賢い乙女たちと5人の愚かな乙女たち	〃	ティヴォリ近辺
ミ ユ ケ	シナイ山へ移送される聖カタリーナの亡骸	〃	水門
デ ー ガ ー	聖母マリアと幼児キリスト	〃	風景画習作
シャードウ	カール・イーマーマンの肖像	〃	植物習作
〃	画家の子供たち	シ ョ レ イ ン	雷雨の風景
ゾ ー ン	クリスチャン・ケーラーの肖像	ア ッ ヘ ン バ ハ	ノルウェーの山岳風景
〃	リナルドとアルミダ	ケ ッ ト ゲ ン	自画像
ヴァルトミューラー	ルドルフ・ヴェンツェル・マーコフスキー	ケ ル ス テ ィ ン グ	窓際の子供たち
レ ー テ ル	カール大帝のバヴィア入城	ブ ラ イ ヤ	ワイングラス、果物、ビスケットのある静物画
〃	イルミンの聖柱の崩壊	シュヴィンゲン	窓辺の婦人
フリードリヒ	山中の十字架	ハーゼンクレーヴァー	感傷的な娘
〃	バルト海の眺め	ラ シ ン ス キ ー	コブレンツ旧市庁舎の出窓
〃	リーゼンゲビルゲの風景	ラ ン プ ー	ケルンの街角
〃	教会のある冬の景色	シュレーター	ライン河畔の居酒屋
ダ ー ル	月明かりのローメンの谷あい	メ ン ツ エ ル	パリの平日（パリの通り）
カ ー ル ス	ドレスデンに近いエルベ川の舟遊び	ベ ッ カ ー	山腹
〃	高山の谷間	ロ ル マ ン	鍛冶場のある峡谷
エ ー メ	アルプスの夕焼け	デ ュ ッ カ ー	リューゲン島のバルト海の岸边
リ ヒ タ ー	春の夕べ	フオイエルバハ	海辺にて
シュヴィント	ハイルブロンンのケートヒエン	ベ ッ ク リ ン	イタリア・ポンティ沼の風景
ブレッヒェン	水浴びをする娘たちのいるテルニの公園	〃	眠るダイアナとひそかにうかがう二人の牧神
シュビッツヴェーグ	アルプスの牧草地	〃	二羽の鷹が旋回する城の廃墟
コ ー ベ ル	テーゲルン湖畔の馬上の狩人	O.アッヘンバハ	糸杉
ク ヲ ヲ リ オ	シュタルンベルク湖畔	〃	カンパーニア地方のイタリアの風景
〃	ホーエンシュヴァンガウの眺め	〃	ボンの眺め
レ ッ シ ン グ	二人の狩人	〃	カプリ島
〃	アルンシュタイン修道院	〃	ヴィラ・ボルゲーゼ公園
〃	包囲攻撃	A.アッヘンバハ	デュッセルドルフの旧アカデミー
シ ル マ ー	ロマンチックな風景(アルテナールの城)	ハ ー ゼ ン	デュッセルドルフ美術アカデミーのアトリエの光景
〃	チヴィテラの風景	ク レ ー ヴ ェ ー	田舎教師ヨブス

特 別 展 ドイツ・ロマン派19世紀絵画展 フリードリヒからベックリンまで



Deutsche Malerei im Zeitalter der Romantik
平成元年11月18日(土)～12月24日(日)
会 期 平成元年11月18日(土)～12月24日(日)
展 示 点 数 115点
入 場 料 大人 500円 小児 250円
主催 千葉県立美術館
協賛 千葉県立美術館 千葉県立美術館
協賛 千葉県立美術館 千葉県立美術館
協賛 千葉県立美術館 千葉県立美術館

作家名	作品名	作家名	作品名
シュヴィンゲン	差し押さえ	シンケル	ゴシック様式の城
ヒューブナー	シレジアの織工	フエンディ	聖母マリアの画像の前で祈る婦人や子供たち
〃	狩猟権	シュビツヴェーク	少年と少女
ヴォチエ	裁縫学校	リヒター	夕べの羊飼いの歌
ベックリン	花を散らすフローラ女神	コーベル	湖を背景にした馬上の人と農婦
コッホ	聖なる三賢王の一行とセルペンターラ風景	クライン	山道での休息
〃	聖なる三賢王の一行とセルペンターラ風景	ルンゲ	弟カール・ヘルマン・ルンゲの肖像
ランブー	アリチア近くの風景	オーヴァーベク	「聖ルカ兄弟団」のマントを着た画家ヴィンターゲルスト
エアハルト	ポンテ・サラリオ	フオール	ある学生の肖像
ドレーバー	井戸端に農夫のいる英雄的風景	シャードウ	エリーゼ・フレンケルの肖像
フリードリヒ	山を背にした農家	トーマ	少女の頭
〃	城の廃墟と教会のあるタラントの風景	メンツェル	老人の頭の習作
〃	ボヘミア風景	オリヴィエ	シャルマイを手に座る少年
リヒター	滝のある風景	カーロルスフェルト	裸婦画
カールス	ブレンビヒル近のイン川の谷間	オリヴィエ	立っている少年
ショイレン	アルテンベルクの聖堂	レッシング	十字軍騎士の歩哨
ブレッヒェン	ゴシック風教会の廃墟	〃	皇帝フリードリヒ1世バルバロッサの十字軍遠征
アッヘンバハ	雪の森	〃	における1190年のイコニウム攻略
ショイレン	岩壁を背にした盗賊騎士の城	レーテル	アルプスを越えるカルタゴの将軍ハンニバル
〃	冬のラインシュタイン城	ルンゲ	油彩画「朝」の上方部分のための下絵
〃	要塞塔へ渡る	〃	フィリップ・オットー・ルンゲ一日
レッシング	聖地巡礼者のいる山の風景	〃	の時間帯（一日の四つの時） 朝
ヒューブナー	モーゼルケルンの粗末な小屋	〃	同、昼
アルト	ゼーベンシュタインの農家の部屋	〃	同、夕
ショイレン	冬の庵の隠者	〃	同、夜
ラウホ	イタリアの別荘のテラスにて	ゾーシ	ローレライ
エーメ	冬の聖堂		



フリードリヒ「山中の十字架」



ベンデマン「二人の少女」



企 画 展

房総の美術家シリーズ-19-

山 本 不 二 夫 展

会 期 平成元年 7 月 1 日(土)~30(日)

26日間

展示点数 63点

入場者数 10,969人

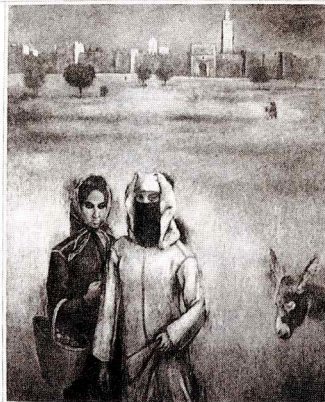
山本不二夫(明治39~昭和59)は、千葉県佐原市に生まれ、旧制佐原中学校、東京商科大学(現、一橋大学)を卒業の後、内務省に奉職するが、佐原中学校で同級生であった水彩画家小堀進に刺激され画家を志し、昭和9年(1934年)、二科展、日本水彩画会展に初出品し入選した。特に、二科展では藤田嗣治に師事し、作品を発表しつつ、昭和40年(1965年)の第50回展では内閣総理大臣賞を受賞し、また、日本水画会展も没まで出品し、水彩画を描きつづけた。

本県にあっては、昭和24年(1949年)の県展創設以来、県美術会の運営に参画し常任理事などを歴任、千葉県教育功労者となっている。

この展覧会では、風景画・人物画などで温厚で誠実な作風で知られている山本不二夫の作品を一堂に展覧した。

企画展 房総の美術家シリーズ-19-

山 本 不 二 夫 展



平成元年 7 月 1 日(土)~30(日) 午前9時~午後4時30分
月曜日休館 入場無料

千葉県立美術館 TEL 0472-42-0311

出 品 目 録

作 品 名	制作年	作 品 名	制作年
油 彩		静 か な る	1982
花 を く わ え る 女	1948頃	砂 の 床	1983
切 株	1951頃	花 を か ざ す	1984
断 想	1955	ユ ン フ ラ ウ	不詳
岩 の 芽	1956	春 の お と ず れ	不詳
鳥 と 語 れ ば	1957	水 彩	
北 安 曇 風 景	1957頃	水	辺 1935
腰 か け る 裸 婦	1958	真 鶴 漁 港	1935
朝 粧	1959	監 督 船 就 航	1936
裏 磐 梯	1960	総 領 息 子	1938
ハイデルベルグ風景	1961	静 か	1939
立 て る 女	1963頃	佐 原 風 景	1939
巖 の 華	1964	高 楼 聴 蟬	1939
夕 べ の 女 達	1965	美 し き 佐 原 河 港	1940
あ し た の 女 達	1965	外 堀 線	1940
お じ さ い の 咲 く 頃	1966	村 の 美 人	1940
花 を さ さ げ る	1966	佐 原 の 跳 橋	1941
白 椿	1968頃	い た ず ら 小 僧	1941
山 の 湖 で	1969	元 気 な エ ン ヂ さ ん	1942
あ る つ ど い	1970	し ゅ ン せ つ 船 機 関 長	1942
赫 い 道	1971	静 か な る 湖 畔	1943
残 雪 消 え る 頃	1972	佐 原 の 土 手 に て	1943
鳥 と 戯 れ る	1976	十 六 鳥 の 娘	1946
め ざ め	1980	茨 城 風 景	1949
集 い	1981	初 夏 水 郷	1950

出 品 目 録

作 品 名	制作年
信濃の磐梯	1952
野の	1958
裏磐梯	1960
上越浅	1963
湯沢早	1967
白馬曇	1969
五竜曇	1972
奥只見の秋	1974
晩秋の湖畔	1977

作 品 名	制作年
新緑の小海線	1978
山麓待春	1979
入笠山にて	1981
安曇野新緑	1982
山湖の秋色	1983
パリー秋	1984

参考資料

スケッチブック
絵皿



第4回現代日本具象彫刻展

会 期 平成2年2月2日(金)～2月25日(日)

22日間

展示点数 59点

入場者数 17,697人

現代日本具象彫刻展は千葉市の「青葉の森公園」に優れた具象彫刻作品を設置するため、昭和59年度から昭和63年にかけて、千葉県・千葉県教育委員会の主催により、3回開催してきた。

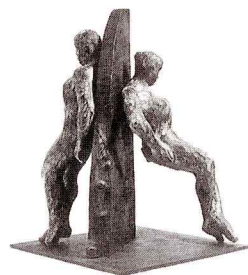
第4回展はこれまでの実績をふまえ県立美術館が主催となって具象彫刻作家に発表の場を提供し、わが国の彫刻界の発展に寄与するとともに、多くの方々に、優れた彫刻作品の美を心ゆくまで鑑賞していただく機会とした。

審査員

小川正隆 ※嘉門安雄 弦田平八郎 富山秀男 中村傳三郎

本間正義 三木多聞(50音順) ※は審査会長

21世紀への飛躍 第4回 現代日本具象彫刻展



1990年2月2日(金)～2月25日(日)

展示時間 午前10時～午後5時(入場無料) 午後5時～7時(入場料100円) 休館日 2月26日(月) 2月27日(火) 2月28日(水)

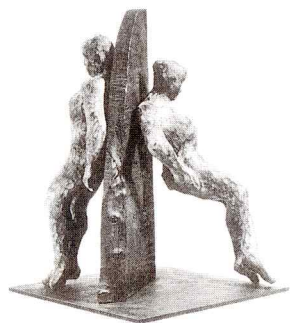
千葉県立美術館 青葉の森公園

出 品 目 録

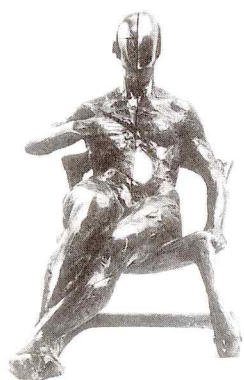
作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
大 賞		佐 藤 晃(東京)	前 へ 向 か う
南 部 治 夫(埼玉)	時 の 流 れ に……(相)	佐 藤 健次郎(埼玉)	鳥 に な り た い
優 秀 賞		サンゲコーサク(香川)	ス ピ ン ソ ル ト
辻 志 郎(富山)	S p a c e t i m e	椎 名 良 一(千葉)	翔
零 駒 無 蔵(香川)	過 ぎ し 日 の ア パ ー ト	杉 山 仁(東京)	ZOOMORPHISM “空”
入 選(五十音順)		鈴 木 宏 幸(埼玉)	N 嬢
朝 倉 二 美(千葉)	風	清 家 悟(東京)	渚 (な ぎ さ)
阿 部 昌 義(東京)	坐 像 (静)	関 正 司(千葉)	V E N T O S E T A
天 野 恵 子(東京)	無 限 に ・ 卵	高 田 大(神奈川)	静 か な 日
石 塚 明 夫(東京)	ト ル ソ	竹 村 芳 樹(茨城)	詩 人
石 橋 亘(千葉)	時 空 緑	田 中 江 里(東京)	ト ン ネ ル
イソグヒデノリ(大阪)	bar body“891211” ELEGANT WOMAN	田 中 充 樹(香川)	ウサギの耳はよくまわる
市 村 緑 郎(埼玉)	笹 舟	玉 野 勢 三(京都)	ワ ン ピ ー ス の 少 女
井 上 智 宏(東京)	感 情	辻 忍(神奈川)	こ か げ
岩 坂 登(千葉)	凹みの形態の少女の胸像	外 岡 秀 樹(大阪)	追 憶
海老根 美奈子(茨城)	MY WAY (私の未来は私が決める)	中 嶋 登 茂 美(愛知)	帽子と靴とかくれんぼ
大 城 章 二(東京)	風 影 II	長 嶋 栄 次(千葉)	可 愛 い お 客 様
大 塚 則 子(東京)	天	中 野 滋(神奈川)	渡 来 す る 日 々
大 村 富 彦(東京)	通 り す ぎ た 思 い	檜 原 北 悠(アメリカ)	虚 空
岡 本 銑 二(茨城)	雨 の ち 晴	西 巻 一 彦(神奈川)	夏 の 日 に
岡 本 参 千 峯(埼玉)	風景の中で……鳥と少年	二 藤 規 朗(埼玉)	家 族
奥 田 秀 樹(広島)	M の 日 曜 日	野 口 信 夫(埼玉)	時 遊
押 元 信 幸(東京)	風 丰	長 谷 川 修 三(群馬)	太 陽 の 光
加 藤 可 奈 衛(千葉)	KISSING FISH	服 部 八 美(岐阜)	人 ・ 間 ・ 風
後 藤 敏 伸(富山)	翔(SHOW) -MOMENT	浜 野 喜 甫(千葉)	愛 す る 緑
小 林 芳 雄(埼玉)	駝	番 浦 有 爾(京都)	鳥
酒 井 良(千葉)	山 を 見 る III	藤 巻 秀 正(新潟)	森 の 詩

作家名	作品名
本田 貴 侶 (埼 玉)	ある晴れた日にーあしたの予感
松 本 雄 治 (神奈川)	太 古 の 風 景
三 上 祥 司 (新 潟)	マ ー ス
三 木 勝 (神奈川)	彼 方 (か な た)

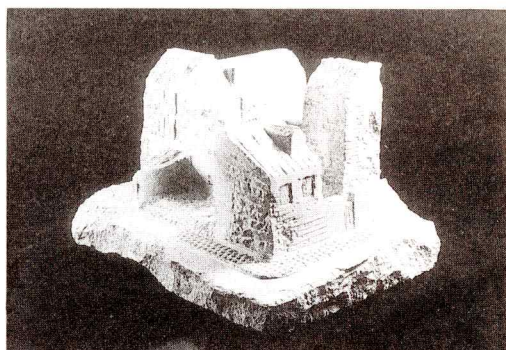
作家名	作品名
溝 口 清 久 (和歌山)	限りある生へのレクイエム
宮 本 浩 司 (東 京)	流れゆくガイア
矢 貫 伸 (東 京)	風 化
山 村 直 敬 (神奈川)	未 来 を み つ め て



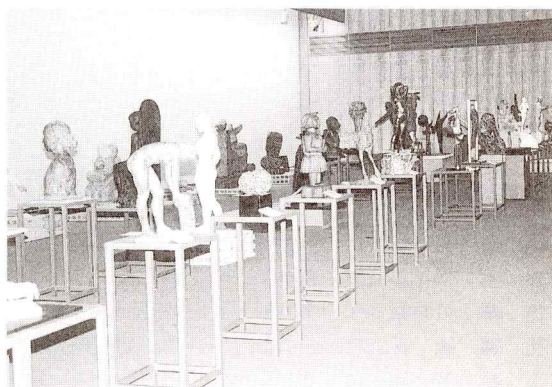
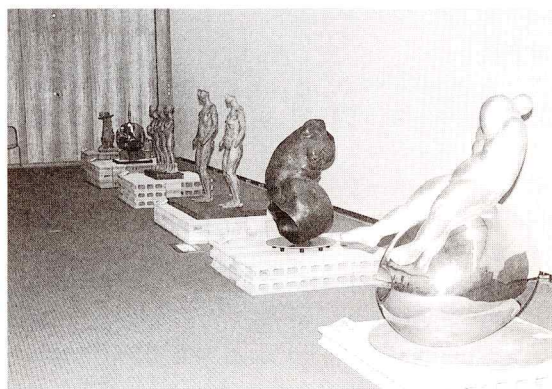
大賞 南部治夫「時の流れに...(相)」



優秀賞 辻 志郎「Space time」



優秀賞 零駒無蔵「過ぎし日のアパート」



第13回 千葉県移動美術館

第13回
千葉県移動美術館

会 場 ①三橋記念館（鎌ヶ谷市）
②酒々井町中央公民館
会 期 ①平成元年11月22日(水)～12月4日(月)
② " 12月7日(木)～12月19日(火)
展示点数 ① 42点 ② 46点
入場者数 ① 946人 ② 899人

館収蔵作品を中心に県展受賞作品の一部を加えて移動展覧を行い、美術品が身近に鑑賞できる機会を提供した。



1993年 11.22(水)～12.4(月) 鎌ヶ谷市 三橋記念館
12.7(木)～12.19(火) 酒々井町中央公民館
※ 三橋記念館は、鎌ヶ谷市にある、三橋記念館の収蔵品を展示する。

出 品 目 録

作 家 名

作 品 名

●館収蔵作品（※は酒々井町会場のみ出品）

日本画

富 取 風 堂 葛 西 風 景
高 畑 郁 子 メ ス テ ィ ー ソ の 女 達
後 藤 純 男 山 門 雨 後

洋 画

浅 井 忠 フォンテンブローの夕景
※ " 京 都 高 等 工 芸 学 校 の 庭
松 岡 寿 森 と 小 川
大 下 藤 次 郎 青 梅
都 鳥 英 喜 八 瀬 の 秋
三 宅 克 己 小 諸 城 址
石 井 柏 亭 舞 姫 秋
長 谷 川 良 雄 晚 秋
安 井 曾 太 郎 熱 海 附 近
梅 原 龍 三 郎 皇 居
水 野 以 文 草 花
古 賀 春 江 風 景
中 西 利 雄 南 仏 風 景
小 堀 進 ロ ン ド ン の 朝
荒 谷 直 之 介 那 覇 の 踊 り 子

彫 刻

柳 原 義 達 風 の 中 の 鴉
舟 越 保 武 婦 人 像
関 正 司 I R O N L A D Y

工 芸

香 取 秀 真 鳩 香 炉
" 鳳 凰 文 様 花 瓶
津 田 信 夫 変 貌 七 色
" 閑 鱗 上 下

作 家 名

作 品 名

宮 之 原 謙 象 嵌 磁 鉢
土 肥 刀 泉 釉 彩 兩 耳 花 瓶
藤 田 喬 平 飾 筥 ・ し だ れ 櫻

書

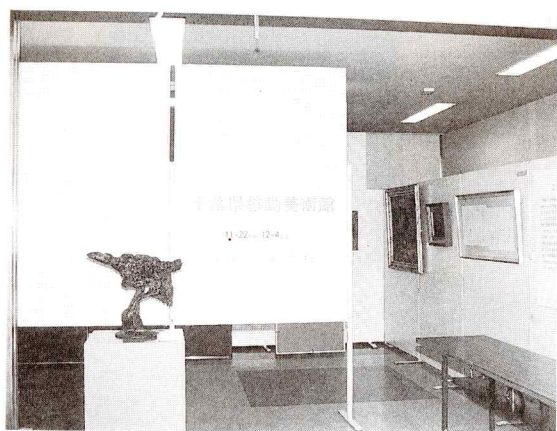
大 石 隆 子 待 郷 之 山 君
種 谷 扇 舟 故 視 思 明
金 子 聰 松

版 画

浜 口 陽 三 西 瓜
" パ リ の 屋 根
※ " 1 9 0 と 1 匹
深 沢 幸 雄 虚 空 に 乱 れ る
" 渦 状 生 雲
※ " 戦 慄 (ト ル ソ)
星 襄 一 星 の 森 (大)
" 王 の 樹
※ " 野 の 木 (A)

●第41回県展出品

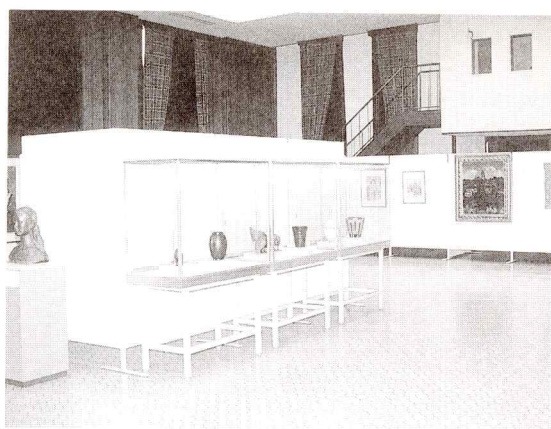
上 田 廣 生 (淡 墨 桜)
(日 本 画 ・ 県 展 賞)
中 島 敏 明 ジ ブ シ ー
(洋 画 ・ 県 展 賞)
柴 田 良 貴 腕 を あ げ た 女
(彫 刻 ・ 県 展 賞)
湯 野 川 恵 線 刻 ノ 器
(工 芸 ・ 県 展 賞)
川 口 溪 仙 安 處 即 為 郷
(書 ・ 県 展 賞)
座 間 騰 霄 唐 詩
(書 ・ 文 部 大 臣 奨 励 賞)



鎌ヶ谷市
(三橋記念館)



酒々井町
(酒々井町中央公民館)



普 及 事 業

「美術講演会」は特別展に併せ年3回、「美術を語る会」は実技関係を中心に10回開催した。

実技講座は、経験者を対象とした美術館講座8種12講座、延114日、初心者を対象とした友の会講座9種12講座、延63日開催した。

図書は、年間190冊収集し、現在3,384冊を収蔵し、情報資料室に於いて県民の利用に供している。

博物館実習は13大学24名を受け入れた。

刊行物は展覧会に併せた図録、チラシ、ポスター、目録、更に館報4回、房総の美術史12回、年報、事業案内、収蔵品目録などを刊行した。

「学校巡回展～19世紀バルビゾン派から後期印象派まで」として、館蔵作品の複製を含め、複製画10点をもって県立高校4校を巡回展示した。

そのほか、県芸術祭、団体展への協力を行った。

(1) 近代日本美術における東と西

講師 東京大学教授 高階 秀爾氏

期 日 平成元年 5 月 27 日(土)

参加者 120 人

日本の近代はあらゆる面で西洋のインパクトのもとに展開してきた。しかし美術の分野では日本は長い伝統を持っている。それが近代になって西洋の新しい見方・技術が入る。どう入ったかを油絵に限って話したい。その場合、「近代」というと明治末年からということになるが、絵画では西洋とのつき合いは明治以前からあるので、明治末年までの時代を四つの段階に分けて考えている。

第一の時期は鎖国時代。ごく少数の画家が洋画を秀れているものとしてとり入れようとしている。長崎を通して限定されたオランダとの交流で新しい絵画の描き方を知る。解体新書に係る人達、特に図版に関して小田野直武、司馬江漢の活動。その後の北斎・広重の絵にも西洋技法が入っており、日本の近代を準備した時期としてよいだろう。

幕末から明治初期は西洋との交流はできたものの、洋画家にとっては先生も教材・手本もない時期。初期洋画の時代を第2期としている。

明治9年国立の工部美術学校を開校し、イタリアからフォンタネージを呼び、本格的油絵教育を始めた。この中で育ったのが浅井忠などであるが、7年で閉鎖、明治20年から芸大の前身、東京美術学校が創立する。当初は油絵料がなく日本画中心であり、一時期、西洋との直接の接触がなくなった。しかし、明治29年に洋画科がつくられる。この20年間、本格的に取り組み始めた時代を第3期と呼ぶ。

その後を第4期とするが、美術の中心はフランスと考えられるようになり、日本人画家も多数留学し、パリから直接指導されて、影響を受けるようになった。

各時代毎に接触する相手が異なる。1期がオランダ、2期は英学中心でイギリス。3期でイタリア、4期はフランスとなる。

これら4期に実際にどういう形で西洋の絵をとり入れていったかをスライドを通して見ていきたい。

優れた画家は西洋を入れながら、日本の感受性を生かしている。日本の近代は単なる西洋化ではなく、西洋化と日本の歴史のぶつかり合いであり融合であったと考えられる等、作品解説をまじえながら話された。



(2) 岸田劉生をめぐるいくつかの謎

講師 美術評論家 瀬木 慎一氏

期 日 平成元年 9 月 30 日(土)

参加者 115 人

白樺派の画家をきめるのはむずかしい。だが10周年記念展を催す頃には、岸田劉生は白樺派文学者が挙って推す最大の画家になっている。先輩の大家も多くいたが文展・二科会へと分れていき、彼を派の代表とさせている。その後彼の芸術観も変わり、ロダンをめぐるの同人達との意見が異り、きびしい批判を向けている。更に浮世絵・宋元の美術・ルネサンス期西洋美術に関心を示し、30才代で老熟の域に入る。劉生個展が催される頃は画家としての立場を確立し、新領域へ踏み出してゆく。これが白樺派の文学者



を引き付けていくことになる。彼こそ白樺派を主導した代表する存在であろう。

この画家についての研究も進み、殊にこゝ20年間に多くの資料が出て来ている。かつて思った劉生観とは違ったものを感じてきている。彼を一箇の人間と見るとかなり複雑な人間で、彼をどうとらえるかにより見方が変わる。私としては彼の作品からさぐり出そうと考える。

1891年生まれ、ピカソより10才若く、明治の先覚者岸田吟香の4男。第4回文展入選後画歴が始まる。生家の没落後転居を重ねる中で、多くの名作を残している。「切通し」の作品は代々木山谷時代のもので、ドライな強い大地の描写は彼のその後の独特の画風となっていく。

震災のため京都に住むが、伝統色の強い気風の中で東洋への回帰が始まる。浮世絵・宋元美術にも関心が強まるが、鎌倉に戻って再び油絵に没頭する。しかし絵もよく売れないまま不遇のうちに38才で生涯をとじることになる。

38年の短い生涯であったが、若くして頭角をあらわし大家の一員に入られている。本人は不満を感じながら屈曲した道を歩んでいくが、一本のシンのようなものを秘めながら絵を描いていく。これは一体何だろう。スライドから見たい。

劉生は大地を描いた。大地への強い執着が特徴であろう。当時としては海を描くものが多かった中では彼は孤立している。この大地との一体化を変えようとしないう頑固さの中に彼の個性が明らかに出ています等、スライドを通しての話があった。

(3) 北方ロマン主義の絵画

講師 坂本 満氏（美術評論家）

期 日 平成元年12月9日

参加者 96人

ロマン主義絵画は19世紀初めまでヨーロッパ美術界を覆っていた古典主義に対抗して現われた画派である。ルネサンス以後少数ブルジョワの芸術であったものが、市民革命後現われた中産市民階級へと移っていったが、彼等は社会の主流を占めるものの芸術を享受できる生活になっていない。文化を味わえないから新しいものは知らず、逆に保守的であり前時代の文化を尊ぶ。古典主義がもてはやされた時代であった。この中であらゆる点で古典主義と性格を異にするロマン主義が1825年頃登場する。

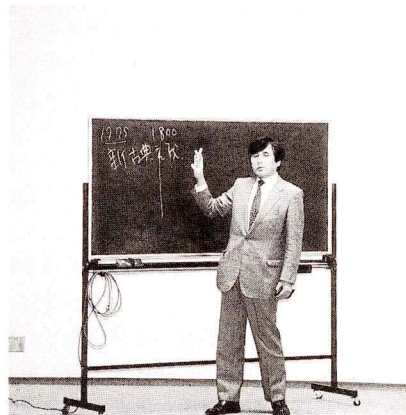
古典主義とロマン主義では、静的な構図に対して動的な、線状的な形式を整えるのに対して輪郭を見せない色彩表現、古代ギリシア、ローマに取材するのに、後者は中・近世の詩人の作品から発想を得ている。

ところで古典主義に比してロマン主義は中近東・北アフリカに題材を求めている。そこにはヨーロッパの基になっている中世を知るには中近東を知らなければならないという学問的な誤解がもたらした傾向らしい。また内的なものを重視している。非現実に対するあこがれが強烈に起ったものであり情熱が重要なテーマであった。

フランスロマンに対してドイツロマンでは自然の中に神を認める。当時のヨーロッパでは考えられない。自然は人の生きる手段で人より下等なもの、神と同等には出来ないとしている。だがフリードリヒ等の作品には自然を神聖なもの、神の存在する場と考える汎神論的信仰心が表現されている。

風景画が出てくるのは16世紀からだが17世紀に独立した絵画となる。これが古典主義に由来する合成風景と、オランダに見られる自然風景がある。当時一般には歴史画に価値があり風景・静物は安く見られたが、この自然風景派が18世紀にイギリスに移っている。そして19世紀に入ると近代画の重要な位置を占めてくる。特に印象派・後期印象派は風景によって成り立っている。フランスでは風景画で重要な人物は出てこない。北方＝ドイツ・オランダ・イギリスの方が風景画では重要な働きをしている。

では、スライドによって、その風景の中に汎神論的な宗教というものが、どんな形で表現されているか、フリードリヒ等の絵画によって見ることにする。（以後スライド解説）



美術を語る会

第1回 平成元年 5月20日(土)

話題提供者 原田 実氏 (美術評論家)

テーマ 青木繁の海の幸をめぐる

参加者 22人

「海の幸」は近代洋画史上重要作品と評せられるものである。この作品が出された時は彼が美校卒業期、親友や恋人と共に活動していた時代、いわば彼を含めた明治の浪漫主義を背負っている作品だからである。

浪漫主義が起るいきさつについては、日本と西欧では発生過程の違いがある。すなわち19世紀に起る新古典主義に反発して生まれたものでなく、明治の富国強兵策によって成立した市民社会、この自己表現として形づくられたものが明治浪漫主義と言えよう。

文学における北村透谷の場合、初期の民権運動の挫折から、屈折→自殺ということになるが、明治体制の整備につれて個人内部への制約が進行してくるといふ流れを、彼はいち早く感じとっていたものだろう。

その後発行された「明星」は文学ばかりでなく美術界からも参加し、藤島武二は「明星」の表紙をかき、また、白馬会第八回展に「天平のおもかげ」を出品している。当時フランスから黒田清輝によってもたらされた外光派が白馬会にみなぎっていたが、武二はこの中から独特の世界をつくる。その最初の作品であったわけで、浪漫主義を色濃く宿している。この作品が青木繁に大きく影響している。明治に浪漫主義運動があったかどうかは疑問であるが藤島武二及びその部類に入る人には明らかに浪漫主義を感じさせるものがある。

この動きはこれに止まらず自然主義と重り合っている。日本の後進性が外国から入る主義を吸収し尽さぬうちに次の衣を受け入れるという明治時代、この激しい動きの中で青木繁は浪漫主義に骨がらみ取り組んでいた、その時の作品が「海の幸」であった。しかし、骨がらみのため、力尽きることになる。その後作られた「わだつみのいるこの宮」から彼の没落が始まる。「海の幸」の躍動とは対極の沈静な作品は、すでに当時の人の認めぬところ。結果は最下位、不遇のうちに28才で没する。

日本のすぐれた作家は早死が多い。恵まれぬ生活、創作活動で多い破滅型等、日本の近代の成立・構造にかかわるものと思う。青木繁等当時の作家の活動を調べれば、この関係もより鮮明になるのではなからうか。(以後スライド解説)

第2回 平成元年 6月24日(土)

話題提供者 関 主税氏 (日本画家)

テーマ 「すばらしい作品を描くために」

参加者 39人

頭に浮ぶことを話すので、つながらないこともあると思うが、総てはこの世界につながっていくものと思う。

長年日本画をやっているがわからない。専門家がわからないのだから皆さんは気軽にやられるのがよいだろう。

死を忘れた現代。死という終りの時をしっかりと見詰め、自分が如何様に死ぬるかを考えないのでは、よい芸術は生まれない。戦時中、死に面していた時に自然の新鮮で美しいものであることを見、そんな時に芸術を知る。にげないで死を見つめるとき自然の美しさを見る。そういう中で私の仕事を仕上げていきたいと思っている。かつて長野の山中で総毛立つ自然の美しさを体験した。その中に何か深いこいのなぐさめを感じた。

日本画に限って言えば、現代画家は古典の咀嚼がない。一人が優れたものを出すとすぐ同じものが多くなる。皆自分なりの特性はもっている。自分の心で描くことが大切。そのときに古典の力が関与する。古典には一つのものを表現するのに最もよい表現方法を持っている。この勉強の上に立って無心に描いたとき、そこに心打つものが出てくる。素人が専門家のまねをしてはならない。自然が先生である。個性喪失の指導を受けてもよい絵はできない。私の師も自然から教えるを受けることをさとされた。

人にはどこか必ずすぐれたところがある筈、それを引き出してくれる人がよい指導者。引き出してもらうためには描いたものを見せねばならない。その時に前述の古典の学び方が必要になる。多くの表現方法を見て、自分に合うものを取り入れること。自然に接することの多かった原始の絵がはるかに素晴らしい。

皆さんがそれぞれに持つ個性、表現したいものをやってみる……ことを奨めたい。

第3回 平成元年 7月15日(土)

話題提供者 天野 三郎氏 (洋画家)

テーマ 「山本不二夫の芸術」

～酒と人と芸術～

参加者 67人

画家らしからぬ風貌、学者肌で職業画家とは違っており、酒を好み自由美術の画家達と語りあかすという人物で、私もその一端に加わっていた当時を思い出す。

先生は二科の大衆路線と関係あり、「うまい丈では絵ではない」と、審査ではまずい絵にも手を伸ばす。また「奇妙なものでなければ作品とは言えない」として、素人の描く自然な奇妙さを愛されている。派手な二科の中にあっては地味なほうであった。

作品を見ると、油絵初期の作品は強烈。スカイブルー・パーミリオンを使った明るい絵。その後黒が多く

なり、晩年は黒と灰色であった。この朦朧たる絵の中にエロチシズムあり、抒情性あり文学性が秘められていたのだ。しかし黒がかっていく中に、もう一つ語ろうとする色が出てこないのではないかと感じる。

初期の水彩に見る「はね橋風景」は、絵が好きでたまらない画家の対象物を見るやさしい目を感じる。絵は「感動」と思う。だが油絵に変わるのは、戦後競争の厳しい社会を反映してのことであろう。水彩から変わったところから油絵の配色の強烈さはない。しかし、水郷佐原のにおい、それにムードを大切にするのが先生の作品の特色だろう。

山本不二夫の絵には通俗臭の強い中に傑作を求める。初めから絵の道に入ったのではない。人生を味わいながら絵の道を選んだのであり、決してうまくはないが、うまさだけが絵ではない。

いろいろ受賞されたが1965年総理大臣賞を得た「あしたの女達」は完成された作品であろう。充実したもので、人物描写は素朴な表現で絵を盛り上げていたと思う。前述の「奇妙なものではなければ……」はドイツの哲学者の言葉だが、先生の作品には特にそういう感を深くするものがある。

第4回 平成元年8月26日(土)

話題提供者 武田 武弘氏(漆芸家)

テーマ 「漆による私の制作のあり方」

参加者 18人

漆というと、蒔絵とか螺鈿とか絢爛豪華なものが出てくるが、私は石像が風化され、角がとれた姿の中に、今まさに消えようとする自然の美しさを感じ、これを漆芸に求めようとした。漆ぬり仏像で乾漆というものがあるが、砥粉を水でねり生漆(セシメウルシ)を入れて下地の布にぬり固める方法である。これを用いてレリーフ状にして表現しようとした。

ものを表現するのは技術的なものではない。物を作るのではなく、何に興味をひかれたか、一番大切なテーマは何であるか、主人公は何に苦しんでいるのか、目でみたスケッチではなく、心のスケッチを重視している。

こうした考え方では、漆芸に螺鈿・蒔絵はいらない。乾漆法(サビ)で表現したときに装飾ではない、美という自分を主張する作品作りに近づくことができる。

今までの作品で苦勞したものとして、手古奈の悲恋を現わす為に「足あと」を、雨月物語の浅茅の宿での妻の心情を表現するのに「帯」を用いたが、物語の凝集を何で示すかは最も考えるところだ。「能」など、狭いスペースの中で、単純化した仕舞を演出するのを見ると、今の時代、自己を見失いつつ、ある自分を見出す思いがする。

漆ぬりは刷毛を用いるが、私はスポンジをタンポンにして叩きぬりつける。浮んだ水分を和紙で吸いとる。

この手法だと前述の石像の感覚が得られる。何を表現しようとするかという場合、考えられるあらゆるものを総て並べてみる。無駄を承知でやる中で、「何故」の問いに、大切なものをハッと気付く。

基礎はきちんとやっておくこと、表現は自由だと何でもやると「くるい」が出てくる。日本画では胡粉とさから始める。この仕事は手がつかれる。でもとことんまでやっているうちに「何んでこれやるのか」という、自分との対話ができてくる。これが次の仕事に生かされていくのではないだろうか。

第5回 平成元年9月16日(土)

話題提供者 小池 賢博(当館副館長)

テーマ 「白樺派と近代美術」

参加者 37人

日本の近代美術を考えると『白樺的なもの』は大きな意義がある。最初に美術に登場するのは岡倉天心であり、日本画家ではあるが現存される高山辰雄氏は白樺派を体験されている方の一人と思う。

現代大衆化されているスポーツは白樺派の人々によって日本に紹介されたものだ。それは当時日本が日露戦争に勝ち、第一次世界大戦で潤ったよい時代であり、白樺派は学習院出が多かった。彼らは華族や富裕な階級の子弟で、文学ばかりでなくあらゆる方面に広く自分達のやりたいことをぶつけていたものである。とは言え、当時青春を欧歌し活動していた「パンの会」とは対称的で、宗教的・思想的な面が強く、神は外にあるものではなく自分の中に在るとし、価値の基準も外ではなく内にあると考えた。

彼らの出した文芸雑誌は西洋美術を積極的に紹介している。明治以来の美術指導者である岡倉天心は西洋の長所を入れて東洋の復興を図ろうとしたことに対し白樺派は西洋にあこがれ、それにのめり込んでいきつつ、その中から東洋の良さを発見したといってよいだろう。また当初属国として軽視されていた朝鮮に対してもまじめに取り組んでいる。

白樺は震災のために8月号で終わった。それ以後は個人の活動になる。岸田劉生はその代表的な人だと思う。

以後、同人達の作品はぐっと生長していくことがわかる。

明治期の天心という個人の活動が、大正期で「白樺」という集団の活動になるところに時代の変化、進転の早さが象徴されていると思う。

第6回 平成元年10月28日(土)

話題提供者 中村 象閣氏(書家)

テーマ 「書のこころ」

参加者 27人

書を始めてから60年。書を通してその幸せを感じている。

終戦後書道は省みられなかったが、現在は盛んになっている。松坂屋での「昭和の書」展では絵画と並んで展示されているが50年前は考えられないことであった。

書は芸術だろうか。書は文字を素材とするもので、文学は我々の意志を伝達する方法・道具である。東洋的な考え方では実用的なものを美化し芸術化する特性がある。文字という実用品を美化し芸術の域にもっていく。空海が最澄に宛てた手紙、また蘭亭の会での王羲之の序文（蘭亭叙）は実用品であるが、立派な芸術品として現在も手本になっている。

学校教育の中でも書は取り上げられ、現在の書道の隆盛のもとになっているが、小中学校では国語の中の書写として扱われ、正しく書くことを目標とし芸術的要素は含まれない。毛筆を使うのも、硬筆では文字が小さくなるので大きく書いて筆順を示す方便である。高校は音楽・絵画と共に筆を用いた創作活動で芸術に入っていく。書初めやクラブ活動での書は、個性を伸ばす学習の場と考えたい。

上手でよい字・上手で悪い字・下手で悪い字・下手でよい字があるが、下手でもよい字を書きたいもの。品のよい字が書けるかどうかは人間性の問題。子規絶筆のへちまの句の書は人を魅する本物の書といえよう。

文部省作成の書道理論編では、文字をもって美しいもの表現するとあり、読めなくてはいけないとは言っていない。読めなくても書とする考えが現在では出てきている。

大衆性という点では書は魅力が薄いが、今では生きがいの手段として習う人が多い。

書は一生書いても際限がない。また書には色のないこともあきさせないものだろう。

第7回 平成元年11月25日(土)

話題提供者 中島 幹夫氏（彫刻家）

テーマ 「彫刻と環境デザイン」

参加者 18人

学校を出てすぐ学校に残って助手をやっていた頃から石彫を専門にしていたが、外で彫って中に持ち込むと、光の加減で感じが非常に違ってくる。石彫をこのまま続けるのなら外の仕事一本にして大きな物も手がけたいと思った。当時まだ環境デザインという言葉はなく「造園」と呼ばれていたので、その中の造形（川・道をつくる、山の基本的な形、子どもの遊び場づくり……施設ともいう）を手がけた。

その頃、あるディベロッパーがガーデンタウンの仕事に依頼して来たので、基本案を作ることになった。居住者を考えると、多分地方出身の方もいるだろうと、

田舎の風景を作ってみようと粘土で形を造ってみることにした。ふる里志向などという言葉があるが、我々のやることはそんなつもりではない、わからないままに彫刻的発想でとり組んだ。

かつて師事した菅原先生は、よく「川に学べ。川の流れには急流もあれば淀みもある」と言われていた。ガーデンタウンは風が強い。そこで高低をつくり低い所にテニスコート、高い所はそこから水を落す。真中に川のような道を設けた。広狭を設け、広い所はバレーコートになる設計で、先生から教えられた川の流れを実際に生かした例である。

その後、都内、神奈川、大阪と手がけている。中でも、板橋区のサン・シティは武蔵野林の端の台地であり、緑・遺跡が残されている。これ等を生かしながら設計した。

塑像は心棒に粘土をつけていく。石で刻む場合は元あるものを生かしながら自分の考えをもとにけずっていく仕事である。サン・シティの場合は良い自然が残っている。これをこわすのではなく残すことが創ることだと考えて設計を進めた。（以後大阪のベルパークシティの設計及び彫刻配置等についてスライドで紹介）

第8回 平成元年12月2日(土)

話題提供者 大原 秀之氏（絵画修復家）

テーマ 「絵画の修復について」

参加者 20人

修復家の仕事はあまり判ってもらえないが、現在展示されている絵画は、多少とも修復の手が入っているといえよう。修復は絵画だけではないが、メインは絵画になる。美術館にある作品を保存・修復を担当する職業である。

私は1976年デュッセルドルフ美術館の修復室に入った。その後修復センターに移り、修復官として勤務し、近現代絵画修復を手がけた。平成元年日本に帰り鎌倉で独立した。今回のドイツロマン展の保存を担当している。

仕事の内容は、いわば絵画の医者といえる。直接絵画をさわるだけでなく、絵の置かれている環境にも注意している。

特に問題になるのは絵の老化現象で、ヒビは出てくる。キャンバスはゆるむ、釘は錆る。そこで修復する絵に相対した時、先ず状態をよく見る。どうしてそうなったか原因を追求する。視点として、キャンバスによって、絵の具によって、地塗りによってどんな薬品溶剤がいかをみる。そのためにはキャンバスを横から見る。絵の具がついていないから見やすい。そして裏、木枠と調べていく。ニス層が黄変したものだけはどうしようもない。ニス層を除いて新しいニスに取り替える。ニス層の除去は難しい。下の絵の具に影響し

ない様に配慮する。地塗りは種類が多く、特に19世紀時代ドイツ絵画は地塗りされたキャンバスが出はじめの頃なので、水にもろい欠点がある。

修復するには穴があいているものもあり、ふさいで絵の具をぬっていくが、その為に特に絵がうまくなければならないというものでもない。勿論、研修として模写はやるが、そのみが技術ではない。(以後デュッセルドルフの修復センターの仕事をスライドで紹介)

第9回 平成2年1月20日(土)

話題提供者 増田 陽一氏(版画家)

テーマ 「抽象版画のイメージと私の表現」

参加者 25人

版画といえば浮世絵・風景・人物肖像を思い出すが、何を描いているか首をひねるような傾向のものがある。現代美術の中の版画と考えてほしい。

私の作品のスライドを見て、技法・イメージ作り、創作意図を参考にしてもらいたい。

エッチング画法を用いたものだが植物のイメージと人間像のイメージを重ねたかった。植物の葉脈や昆虫の翅脈は自然の造形の中でも最も美しいもの。これと同じものを造ったのでは単なるコピーになる。同じ美しさの性質をもつ形を人工的に造ることに留意した。

同じ形を並べる構成は現代美術の1つの方法。ウォーホルの作品にマリリンモンローやモナリザの顔を30位ならべたものがあり、「30は1よりもよし」と題している。シルクスクリーン技法で可能な作品だが、統一と変化の中に美を考える原理から、同じもの30の中に違うものがありはしないかと見廻してしまう。この中に動きが出てくる。しかし模倣でイメージを作っているはいけない。自分のイメージをどうやって獲得するかをこれ等の作品から見てほしい。

油絵の場合、絵の中心はどこなのかが問題になる。画面上対比するものから中心をみつけるドラマ的な考え方があがるが、中心だけの絵を描こうという意図を持つ。パネルの上に石膏とボンドを塗り楕円を使って同心円を描く方法をとった。この凹凸面を版に刷ることを考えオフセット法を用いたが正確さが欠ける。

蝶を描いたものは多いが難しい。精密にかいたものをデフォルメしてもうまくいかない。人体の場合は絵の上で変形し省略しても人間像の感覚は残る。

版画はかなり計画性が要求される。特に硝酸を用いて腐蝕させる場合、液の濃淡、気温差、腐蝕時間等で作品が変わってしまう。

抽象的なイメージをどうやって作るかというと、彫刻で三人の例が挙げられる。イギリスのムーアは現実の再現的な形式ではない自由に構成された形の表現で、

フランスのアルプは極度に単純化された曲線の形態で、またルーマニアのブランクーシは一つの課題を追求し素材をみがきあげ単純化されたフォルム。これ等の人々に共通することは、コピーではなく永年の探求・観察の結果作られたものである。私も今までのものを土台にして続けていきたいと思っている。

第10回 平成2年2月10日(土)

話題提供者 南部 治夫氏(彫刻家)

テーマ 「私の制作について」

参加者 26人

富山県井波町で生まれ、美大卒後、家業の木彫の技法を学んだ。その後生地を離れて自分の彫刻をしたいと考え、県の推挙で国内研修生として日大芸術学部で研修した。

卒業した武蔵美大はブールデルの影響を受けた清水先生の系列に入るのでコンストラクションの要素が強く、彫刻としての自由さに欠けると思い、学生時代傾倒していたデスビオの作品のポーズから卒業制作をした。家業の影響から道具に興味をもち、のみを使った木彫の作品も手がけた。

石彫も手がけ、自分の生まれた土地の人々をトルソを通して表現しようと取り組んだ作品もある。しかしトルソは難しい反面、逃げの面もあり、再び全身をきっちり彫りたい願いもあり木彫を主に制作したが、自分の思った形を木におし込むより木という素材から得る形の強さを利用して自分の考えを表現できないかと実験的にやってみた。

今回出品したものは人間という大きなテーマをもった。「時の流れに」という題は特に私が時間に関した想いがどうということではなく、人の気持ちが時代・状況の中で変化するもので、それに対する不信・進歩が出てくる。その中で人間の存在・自分の存在を問い直す気持ちを現わしたかったからである。

今回の作品は習作として作り上げた仕事で白木で制作している。造形的に不十分なところがあるが、素材を色々変えてきた中で今一度原点に戻って木でその質感を引き出す仕事をしてみたいと思っている。先ずは制作に先立って素材の強さに対決しなければならぬ。技術にはしり勝ちな自分をいましめながら、素材感を大きな課題としてやっていきたい。家業は仕上げのみできれいに仕上げる工芸的な仕事である。のみのタッチを生かした歴史は浅いが、工芸的な技法も大切であるが彫る作業を中心に素材を相手に作品を出していきたいと考えている。

実 技 講 座

(1) 日本画講座

期 日 平成元年 6 月13日(火)・14日(水)・15日(木)・17日(土)・18日(日)
20日(火)・21日(水)・23日(金)・27日(火)・28日(水)
(10日間／うち講師指導日数 7 日間)

講 師 齊藤 惇氏

受講者数 27人

内 容 経験者を対象として、花・くだもの・人物等のモチーフにより制作した。同時にドーサの作り方・絵の具・にかわ・筆・紙等の材料・用具の取り扱い方など基礎的な学習の後、彩色の技法について学習した。



(2) 洋画講座

期 日 第 1 期 平成元年 5 月24日(水)・25日(木)・26日(金)・30日(火)・
31日(水)・6 月 1 日(木)・2 日(金)・6 日(火)
7 日(水)・8 日(木)

第 2 期 平成元年 8 月 8 日(火)・9 日(水)・10日(木)・22日(火)・
23日(水)・24日(木)・25日(金)・29日(火)・
30日(水)・31日(木)

第 3 期 平成 2 年 1 月24日(水)・25日(木)・26日(金)・30日(火)・
31日(水)・2 月 1 日(木)・2 日(金)・
6 日(火)・7 日(水)・8 日(木)

(各10日間／うち講師指導日数は各 5 日間)

講 師 第 1 期 小林 数氏

第 2 期 戸田 健夫氏

第 3 期 伊牟田経正氏

受講者数 第 1 期 22人

第 2 期 34人

第 3 期 40人

内 容 経験者を対象として、第 1 期と第 2 期は、ヌード・コスチューム・静物を、第 3 期は、静物・風景をモチーフとして、デッサン、構図、彩色などをはじめ、より幅広い表現について学習した。



(3) 版画講座

期 日 平成 2 年 1 月23日(火)・24日(水)・25日(木)・26日(金)・30日(火)・
31日(水)・2 月 1 日(木)・2 日(金)・6 日(火)・7 日(水)
8 日(木)・9 日(金)

(12日間／うち講師指導日数 7 日間)

講 師 増田 陽一氏

受講者数 19人

内 容 経験者を対象として、銅板・亜鉛板を素材に、凹版画の制作を通して材料や用具の扱い方、エッチングやアクアチントなどの各技法、更に刷りの技法について学習した。



(4) 彫刻講座

期 日 平成元年 7 月20日(木)・21日(金)・22日(土)・23日(日)・25日(火)・26日(水)・27日(木)・28日(金)・29日(土)・30日(日)
(10日間／うち講師指導日数 7 日間)

講 師 酒井 良氏

受講者数 14人

内 容 経験者を対象として、石を素材に、人物・野菜・石仏など立体の表現方法、更に用具の取り扱い方を学習した。

(5) 陶芸講座

期 日 第1期 平成元年4月25日(火)・27日(木)・28日(金)・5月16日(火)
6月6日(火)・8日(木)・9日(金)・29日(木)・
7月14日(金)

第2期 平成元年10月24日(火)・26日(木)・27日(金)・11月17日(金)
18日(土)・21日(火)・22日(水)・12月12日(火)
22日(金)

(各9日間／うち講師指導日数は各6日間)

講 師 第1期 明石 昇氏

第2期 上瀧 勝治氏

受講者数 第1期 35人

第2期 40人

内 容 経験者を対象として、第1期は信楽土を素材にかき落し、象嵌など、第2期は信楽土・半磁器土を素材に、上絵付などをはじめ、土、ロクロ、窯詰め、施釉、焼成等について学習した。



(6) 金工講座

期 日 平成元年10月31日(火)・11月1日(水)2日(木)・4日(土)・5日(日)
7日(火)・8日(水)・10日(金)・11日(土)・12日(日)・15日(水)
16日(木)

(10日間／うち講師指導日数は8日間)

講 師 佐藤 叔孝氏

受講者数 21人

内 容 経験者を対象に、銅板を素材に、鍛金の基礎的技法をはじめ着色の技法などについて学習した。



(7) 書芸講座

期 日 第1期 平成元年9月19日(火)・21日(木)・22日(金)

第2期 平成元年12月5日(火)・6日(水)・7日(木)

(各3日間／うち講師指導日数は各2日間)

講 師 第1期 高木 東扇氏

第2期 浅見 錦龍氏

受講者数 第1期 26人

第2期 33人

内 容 経験者を対象として、第1期はかな、第2期は漢字を中心に様々な表現について学習した。



(8) デッサン講座

期 日 平成2年2月14日(水)～18日(日)・20日(火)～25日(日)・27日(火)～3月3日(土)

(16日間／受講者の自主研修講座)

受講者数 13人

内 容 一般を対象に、石こうデッサンを通して、形のとり方、明暗、立体感など基礎的な学習を行った。

図 書

購 入

	書 名	刊行年	発 行 所	編著者名
美術総記	世界美術大事典第2巻	1989	小 学 館	
	〃 第3巻	1989	〃	
	〃 第4巻	1989	〃	
	〃 第5巻	1989	〃	
	岡 山 の 美 術	1980	淡 交 社	
	トレチャコフ美術館	1987	トレチャコフ美術館刊行委員会	
	講座20世紀の芸術3	1989	岩 波 書 店	
	〃 6	1989	〃	
	昭和画壇の巨匠たち	1989	里 文 出 版	
	眼 の 神 殿	1989	美 術 出 版 社	
	迷走するモジリアニの贋作	1989	国際医学出版	
	異 貌 の 美 術 史	1989	青 土 社	
	美術館は眠らない	1989	朝 日 新 聞 社	
	日本近代美術事典	1989	講 談 社	
絵 画	秘蔵浮世絵大観第4巻	1989	講 談 社	
	〃 第9巻	1989	〃	
	アトリエ美術技法百科1	1988	アトリエ出版社	
	〃 2	1988	〃	
	〃 3	1988	〃	
	〃 4	1988	〃	
	〃 5	1988	〃	
	〃 6	1988	〃	
	〃 7	1988	〃	
	〃 8	1988	〃	
	〃 9	1988	〃	
	〃 10	1988	〃	
	〃 11	1988	〃	
	高山辰雄屏風画集	1976	新 潮 社	
	高山辰雄自選画集	1981	毎日新聞社	
	世界の巨匠シリーズティントレット	1988	美 術 出 版 社	
	ビゴー素描コレクション1	1989	岩 波 書 店	
	〃 2	1989	〃	
	〃 3	1989	〃	
	レオナルド研究	1986	〃	児 島 喜久雄
	〃 (図録)	1986	〃	〃
	川島理一郎画集	1973	日 動 出 版	
	マリー・ローランサン	1976	求 龍 堂	ダニエル・マルシェソー
	洋 画 講 義 録			
彫 刻	佐 藤 忠 良 I	1989	講 談 社	
	〃 II	1989	〃	
	石 井 鶴 三 全 集 1	1988	形 象 社	
	〃 11	1988	〃	
	〃 12	1988	〃	
	〃 別巻1	1989	〃	
	ロ ダ ン	1989	中 央 公 論 社	モニック・ローラン
工 芸	正岡子規を中心に	1936	學 藝 書 院	

	書 名	刊行年	発 行 所	編著者名
工 芸	陶芸石黒宗磨作品集 近代日本の漆芸	1982 1981	毎日新聞社 淡交社	
書	日本書道大鑑 第1巻 " 第2巻 " 第3巻	1982 1982 1982	毎日新聞社 " "	
一般・ 参考図書	山 版 年 鑑 '89 明治ニュース事典 I " II " III " IV " V " VI " VII " VIII " 総索引 千葉県の歴史	1989 1988 1888 1988 1988 1988 1988 1988 1988 1989	出版ニュース社 毎日コミュニケーションズ " " " " " " " " 河出書房	
雑 誌 (合冊・復刻)	復刻 現代の洋画 全29巻	1989	臨川書店	

受 贈

	書 名	刊行年	発 行 年	編著者名
美術総記	十三松堂日記 第1巻 " 第2巻 " 第3巻 様式の歴史 西洋美術のかたち 多摩美術大学50年史 日本美術年鑑昭和52年版 " 昭和56年版 昭和62, 63年版 第30回毎日書道展作品集 第40回毎日書道展作品集 単色版日展書集 第19, 20回日展 日本芸術院授賞理由Ⅲ 日本美術院百年史一巻上(図版編) 一巻下(資料編) 国立西洋美術館三十年史 石橋財団三十年史 世田谷区立世田谷美術館所蔵品目録① 国際絵画市場流通する名画 日本100の美術館 現代美術演習Ⅱ 柘 洸 会 現代の日本美術 東京富士美術館 富士美術館 市 展 40 年 史 笠 間 日 動 美 術 館 小・中学生作文・版画最優秀作品集	1965 1965 1966 1963 1986 1979 1983 1986 1978 1988 1988 1982 1989 1989 1989 1986 1987 1988 1989 1989 1987 1989 1987 1989 1986 1987 1989	中央公論美術出版 " " 美術出版社 多摩美術大学 東京国立文化財研究所 " " 毎日新聞社 " 日 展 日本芸術院 日本美術院 " 国立西洋美術館 石橋財団 世田谷区立世田谷美術館 講談社 JTB日本交通公社出版事業局 現代企画室 柘美術店出版部 美術倶楽部 東京富士美術館・富士美術館 小樽市美術展覧会運営委員会 実業之日本社 全労済中央地方本部	正 木 直 彦 " " 澤 柳 大五郎 藤 井 一 雄 Bゼミ Schooling System 小樽市美術展覧会運営委員会

	書 名	刊行年	発 行 所	編 著 者 名
美術総記	千葉県書道協会創立40周年記念誌 展覧の書の流れ	1989	千葉県書道協会	
	ギャラリー 1989	1989	ギャラリーシルバー企画	
	ちばの芸術家	1989	京 葉 銀 行	
	A R T D E C O	1989	R I Z Z O L I	
絵 画	大 沼 照 夫 画 集	1987	求 龍 堂	
	寺 田 政 明 画 集	1972	愛 宕 山 画 廊	
	現代の日本画 第1巻	1967	三 彩 社	
	〃 第2巻	1968	〃	
	〃 第3巻	1968	〃	
	大 和 繪 に 生 き る	1980	林 雲 鳳	林 雲 鳳
	森 桂 一 作 品 ・ 論 文 集	1970	森教授退官記念出版事務局	
	笹 岡 了 ・ 画 譜	1979	銀 座 ノ バ	
	KAI HIGASHIYAMA	1986	SHCREWOOD	
	東山魁夷 第一巻 風景遍歴 1	1989	講 談 社	
	〃 第二巻 風景遍歴 2	1989	〃	
	〃 第三巻 欧州紀行	1989	〃	
	〃 第四巻 中国紀行	1989	〃	
	山河遍歴 東山魁夷作品集	1989	日本経済新聞社	
	三岸好太郎 一 天折のモダニスト	1988	北 海 道 新 聞 社	北海道立近代美術館
	片岡球子 一 個性(こころ)の旅路	1989	〃	〃
	近代フランス巨匠特集 一 絵画 一	1988	三 越	
	日本の水彩画 1 大下藤次郎	1989	第一法規出版	原 田 光
	〃 2 小山周次	1989	〃	下 平 正 樹
	〃 7 小堀 進	1989	〃	小 泉 淳 一
	〃 12 石川欽一郎	1989	〃	立 花 義 彰
	〃 13 白龍幾之助	1989	〃	早 川 二三郎
	〃 14 三宅克己	1989	〃	三 輪 英 夫
	〃 18 赤城泰舒	1989	〃	匠 秀 夫
	〃 20 不破 章	1989	〃	米 田 耕 司
	スケッチ 百科	1989	日本放送協会学園	
	心 中 櫻 ケ 塚	1989	而 立 書 房	草 間 彌 生
	中 道 譽 伯 弥 画 集	1989	中 道 譽 伯 弥	
	美大・芸大・進学のためのデッサンの基礎	1985	すいどーばた美術学院	
	ワグマンとその周辺	1987	ほ る ぶ 出 版	重 富 昭 夫
	ノ ン キ が 来 た	1989	新 潮 社	阪 田 寛 夫
	上野泰郎 〇号に人物を描く 〇心のメッセージ	1989	三 条 ア ー ト	
	郭 徳 俊 作 品 集	1989	美 術 公 論 社	
	大 内 田 茂 士 画 集	1989	求 龍 堂	
	田 辺 竹 次 作 品 集	1989	田辺竹次作品集刊行会	
	滝口修造 ハウル・クレイ論集	1990	佐 谷 画 廊	
	滝口修造 ハウル・クレイ論集解題	1990	〃	
	柳 敬 助 集	1989	碌 山 美 術 館	
	五十嵐幹 日本画作品集	1989	イサアラフ・ルーム	
	文字のない詩 安元亮祐作品集	1990	不 忍 画 廊	
	べ ル 串 田 画 集	1982	ジャパンソサエティ・オブ・アート	
	日 本 美 人 画 選 上	1962	東 都 文 化 社	
	〃 下	1962	〃	
	日 本 の 自 画 像	1961	南 北 社	桑 原 住 雄
	MILLET I	1921	Henri Laurens	Etienne Moreau Nelaton
	〃 II	1921	〃	〃
	〃 III	1921	〃	〃

	書 名	刊行年	発 行 所	編著者名
絵 画	L'ŒVRE DE COROT I	1965	Léonce Laget	Alfred Robaut
	" II	1965	"	"
	" III	1965	"	"
	" IV	1965	"	"
	L'ŒVRE DE COROT Tables	1965	"	"
	DAUBIGNY	1925	Henri Laurens	Etienne Moreau Nètaton
彫 刻	池 田 宗 弘 作 品 集	1979	聖 豊 社	立原えりが編 島田勝吾絵
	富永直樹彫刻作品	1982	実業之日本社	
	石井 滋 作 品 集	1989	石 井 滋	
	山本正道作品集	1989	新 潮 社	
	"	1989	"	
	舟 越 保 武	1989	ギャラリーせいはう	
工 芸	い の り 原 爆 II	1985	太 平 出 版 社	蓮 田 修 吾 郎
	杉 村 孝 作 品 集		杉 村 孝	
	第27回日本現代美術工芸1988	1988	京 都 書 院	
	日 本 現 代 工 芸 美 術	1977	マ リ ア 書 房	
	黄銅への道—金属造型作家のあゆみ	1982	日 貿 出 版 社	
	公共の空間へ—金属造型作家の活動	1984	"	
書	環 境 造 型 へ の 対 話	1986	"	金 田 石 城
	関 谷 四 郎 作 品 集	1987	アロー・アート・ワークス	
	備 前 浦 上 善 次	1985	山 陽 新 聞 社	
	江 戸 の 名 工	1987	東京都伝統工芸品 産業団体連絡協議会	
	飯 島 春 敬 作 品 集	1983	傳 統 芸 術 社	松 本 筑 峯
	金子鷗亭回顧展作品集	1987	金 子 鷗 亭 回 顧 展 会	
版 画	金 子 鷗 亭 の 書 業	1979	日 貿 出 版 社	
	庭 野 日 敬 書 画 集	1982	立 正 校 成 会	
	書 体 破 体	1982	日 貿 出 版 社	
	現代女流かな書道—飯島敬芳—	1979	東 京 堂 出 版	
	石 橋 犀 水 の 書 業	1984	教 育 書 籍	
	沙と祈り 千代倉桜舟作品集	1988	千 代 倉 桜 舟	
写 真	黄河の印象 千代倉桜舟作品集		"	千 秋 社
	山 田 菱 夏 作 品 集	1988	山田菱夏作品集刊行会	
	関 微 草 堂 硯 譜	1989	龍 田 彦 彦 彦 委 員 会	
	木版画吉田洋三の世界	1990	共同企画通信社	
	小 澤 俊 樹 作 品 集	1989	フ ォ ト テ ッ ク	
	中国 第一巻 仏教東漸	1989	毎日コミュニケーションズ	
一般図書	" 第二巻 聖山名利	1989	"	三 菱 広 報 委 員 会
	" 第三巻 仏土復興	1989	"	
	メッセの町は海だった	1989	千 秋 社	
	人間と空間—21世紀への序奏	1989	プロフェッショナル・ イラストレーション・サービーズ	
	ビジュアルワイド新日本風土記12 千葉県	1989	ぎ ょ う せ い	
	房総の魅力500選 自然歴史編	1989	千葉県企画部国際課	
一般図書	日本目録規則 新版子備版	1977	日本図書館協会	東京タイムズ社 久能山東照宮
	" 1987年版	1987	"	
	海のシルクロードを求めて	1989	三 菱 広 報 委 員 会	
	皇 居 “新 宮 殿”	1969	東京タイムズ社	
	絵と写真でしのぶ徳川家康公		久能山東照宮	

分類別図書数

(平成2年3月31日現在)

分 類	昭和63年度まで	平成元年度	計
美術総記	1,065	44	1,109
絵画	844	80	924
彫刻	128	15	143
工芸	216	11	227
書	100	14	114
版画	86	1	87
デザイン	25	0	25
写真・映像	145	5	150
その他の	45	0	45
雑誌(合冊・復刻)	283	1	284
一般図書	257	19	276
合 計	3,194	190	3,384

	昭和63年度まで	平成元年度	計
購入図書	1,866	66	1,932
受贈図書	1,328	124	1,452

(展覧会図録を除く)

平成元年度刊行物一覧

名 称	規 格	頁 数	発行部数	編 集	発行年月
千葉県立美術館報 Vol.16 No.1～4	B 5	6	各3,000	美術館	元.6～2.2
昭和63年度版 千葉県立美術館年報	B 5	60	1,000	"	元.4
常設収蔵作品展 日録 1期・2期	B 5	4	6,000・2,000	"	元.3・2.1
特別展「房総と近代美術」 図 録	24×24	108	1,000	"	元.4
ち ら し	B 5	2	30,000	"	元.4
ポスター	B 2	1	1,500	"	元.4
車内吊ポスター	B 3	1	500	"	元.4
特別展「白樺派と近代美術」 図 録	B 5	144	1,000	"	元.9
ち ら し	B 5	2	30,000	"	元.9
ポスター	B 2	1	1,500	"	元.8
特別展 図 録	24×25.5	168	1,000	"	元.11
「ドイツ・ロマン派19世紀絵画展」ちらし	B 5	2	30,000	"	元.11
ポスター	B 2	1	1,500	"	元.10
企画展「山木不二夫展」 ち ら し	B 5	2	10,000	"	元.6
ポスター	A 2		1,000	"	元.6
企画展 募集要項	B 5	8	10,000	"	元.10
「第4回現代日本具象彫刻展」 図 録	24×25.5	76	1,500	"	2.2
ち ら し	B 5	2	10,000	"	2.2
公募用ポスター	B 2	1	5,000	"	元.10
展覧会ポスター	B 2	1	1,000	"	2.1
房総の美術史 No.67～78	B 5	4	各 500	"	元.4～2.3
平成2年度 事業案内	A 4	3 折	20,000	"	2.3
千葉県立美術館 英文パンフレット	A 4	4 折	5,000	"	2.3
千葉県立美術館 収蔵品目録	B 5	284	1,000	"	2.3

学校巡回展

高等学校生徒を対象に、美術に親しみ、美術を愛好する心を育むことを目的として、複製画の学校巡回展を開催した。

今回は、19世紀バルビゾン派から後期印象派までの代表的作家の作品10点を4校に巡回展示した。

実施結果

高 校 名	展 示 期 間	展示場所	生徒数
安 房 高 校	元年12月1日 ～ 12月10日	廊 下	1,120
安 房 農 業 高 校	元年12月11日 ～ 12月21日	廊 下	1,001
安 房 南 高 校	2年1月10日 ～ 1月29日	廊 下	1,118
泉 高 校	2年3月5日 ～ 3月20日	廊 下	1,385
計			4,624

巡回作品

作 家 名	作 品 名
カミーユ・コロー	ナポリ近郊の思い出
フランソワ・ミレー	垣根に沿って草を食む羊
ギュスターヴ・クールベ	雪の中の小鹿
エドワード・マネ	笛吹き少年
エドガー・ドガ	舞台のダンサー
ポール・セザンヌ	サンビクトアールピペミュの眺め
クロード・モネ	印象・日の出
オーギュスト・ルノワール	ムーラン・ド・ラ・ギャレット
ポール・ゴーギャン	白 い 馬
ビンセント・ヴァン・ゴッホ	ア ル ル の は ね 橋



博物館実習

関係各大学の依頼により学芸員資格取得希望の学生を下記のとおり受け入れた。

①平成元年7月31日～8月5日

鶴見大学2名、和洋女子大学3名、実践女子大学1名、学習院大学1名、上智大学1名、白梅学園短期大学1名、共立女子大学1名、武蔵野美術大学1名、跡見学園女子大学1名（計12名）

②平成元年8月7日～8月12日

東京家政学院大学1名、千葉大学7名、お茶の水女子大学1名、実践女子大学1名、跡見学園女子大学1名、東洋大学1名（計12名）

団 体 展

太字は県芸術祭関係

展 覧 会 名	期 間	作 品・種 別	展示 点数
第26回全日本総合書道大覧会	4. 11～4. 16	書	972
第 13 回 鳳 聲 会 書 作 展	4. 18～4. 23	書	95
第 59 回 郷 陽 会 展	4. 18～4. 23	洋 画	191
水 彩 展	4. 18～4. 23	水 彩 画	68
武蔵野美大校友会千葉支部展	4. 25～4. 30	洋 画・彫 刻・工 芸	60
第 16 回 千 葉 新 協 展	4. 25～4. 30	洋 画	84
第 9 回 千 葉 美 術 工 芸 展	4. 25～5. 7	工 芸	72
第 15 回 歩 会 彫 刻 展	4. 25～5. 7	彫 刻	51
第 20 回 表 美 展	5. 2～5. 7	表 装・額 装・屏 風	137
千 葉 展	5. 9～5. 14	絵 画・立 体	49
第 7 回 日 中 友 好 書 道 協 会 展	5. 2～5. 14	書	6,251
第 13 回 墨 の 県 展	5. 16～5. 21	水墨画・洋 画・写 真	432
第29回千葉市アマチュア美術展	5. 23～5. 28	絵 画・書・写 真・彫 刻・工 芸	781
千 葉 中 美 展	5. 23～5. 28	日 本 画・洋 画	33
第 12 回 千 葉 一 陽 展	5. 30～6. 4	洋 画	60
第 15 回 獏 展	5. 30～6. 4	洋画・彫刻・工芸・写真	63
第36回千葉県書道協会展	6. 6～6. 11	書	325
第 4 回 日 本 画 四 季 展	6. 6～6. 18	日 本 画	75
第 14 回 関 東 全 展	6. 13～6. 18	日 本 画・洋 画	167
千 葉 幼 児 美 術 展	6. 13～6. 18	絵 画	1,200
第11回新槐樹社千葉支部展	6. 20～6. 25	洋 画・彫 刻・工 芸	54
第 12 回 精 鋭 展	6. 20～6. 25	油 彩 画・彫 刻	100

展 覧 会 名	期 間	作 品・種 別	展示 点数
第 16 回 千 虹 会 日 本 画 展	6 . 20 ~ 6 . 25	日 本 画	47
明 日 を 拓 く 教 育 美 術 展	6 . 20 ~ 6 . 25	油 彩 画 ・ 水 彩 画 ・ 工 作	2,000
第 34 回 二 科 会 千 葉 支 部 展	6 . 27 ~ 7 . 2	洋 画	1,063
千 葉 二 紀 展	6 . 27 ~ 7 . 2	洋 画 ・ 彫 刻	62
第 17 回 水 彩 連 盟 千 葉 支 部 展	7 . 4 ~ 7 . 9	水 彩 画	57
第 69 回 習 美 会 初 夏 大 作 展	7 . 4 ~ 7 . 9	日 本 画 ・ 水 墨 画 ・ 洋 画	161
第 18 回 千 葉 市 勤 労 者 文 化 展	7 . 4 ~ 7 . 9	日 本 画 ・ 洋 画 ・ 書 ・ 写 真	135
第 33 回 千 葉 県 小 中 学 校 書 写 展	7 . 4 ~ 7 . 9	書	1,392
第 21 回 千 葉 市 水 墨 画 同 好 会 連 合 会 展	7 . 11 ~ 7 . 23	水 墨 画	193
第 9 回 ち ば 産 経 現 代 洋 画 展	7 . 25 ~ 8 . 6	油 彩 画	206
日 本 水 彩 画 会 第 5 回 千 葉 県 支 部 展	7 . 25 ~ 7 . 30	水 彩 画	60
第 18 回 写 真 千 葉 県 展	8 . 8 ~ 8 . 20	写 真	222
第 22 回 千 葉 県 高 校 合 同 写 真 展	8 . 8 ~ 8 . 13	写 真	438
第 23 回 漱 雲 会 全 国 書 道 展	8 . 8 ~ 8 . 13	書	800
第 9 回 日 本 春 秋 書 院 千 葉 県 書 道 展	8 . 15 ~ 8 . 20	書	101
第 13 回 千 葉 等 迦 展	8 . 15 ~ 8 . 20	絵 画 ・ 版 画 ・ 写 真	62
第 19 回 い て ふ 会 彫 刻 展	8 . 15 ~ 8 . 27	彫 刻	56
第 17 回 千 葉 市 教 職 員 美 術 展	8 . 22 ~ 8 . 27	日 本 画 ・ 洋 画 ・ 彫 刻 ・ 工 芸	81
第 10 回 龍 峽 書 道 会 千 葉 県 人 展	8 . 22 ~ 8 . 27	書	510
第 13 回 尽 墨 会 書 作 展	8 . 22 ~ 8 . 27	書	40
第 29 回 白 扇 書 道 会 展	8 . 29 ~ 9 . 3	書	2,190
第 19 回 新 構 造 千 葉 支 部 展	9 . 5 ~ 9 . 10	洋 画 ・ 彫 刻 ・ 写 真	140

展 覧 会 名	期 間	作 品・種 別	展示 点数
第 14 回 葉 美 会 展	9 . 12～9 . 17	洋 画 ・ 写 真	65
第 21 回 フ ァ ン シ ー 洋 画 展	9 . 12～9 . 17	洋 画	216
千 葉 県 写 真 展	9 . 12～9 . 17	写 真	130
第27回新世紀美術協会千葉支部展	9 . 12～9 . 12	洋 画	58
第 39 回 千 葉 デ ザ イ ン 展	9 . 19～9 . 24	デ ザ イ ン	58
第 36 回 千 葉 県 勤 労 者 美 術 展	9 . 19～9 . 24	洋 画 ・ 書 ・ 写 真	310
第 5 回 日 本 書 道 学 会 千 葉 県 連 展	9 . 19～9 . 24	書	333
第 33 回 千 葉 市 小 中 養 護 学 校 児 童 生 徒 総 合 展 覧 会	9 . 26～10 . 1	彫刻・工芸・デザイン・その他	4,969
第 9 回 二 科 会 写 真 部 千 葉 支 部 展	10 . 3～10 . 8	写 真	142
第 21 回 千 葉 現 展	10 . 3～10 . 8	洋 画 ・ 彫 刻	91
ダネラ・デコパージュ展覧会	10 . 3～10 . 8	工 芸	123
千 字 会 書 展	10 . 10～10 . 15	書 ・ そ の 他	85
第16回文化書道連合会公募展覧会	10 . 10～10 . 15	書	746
秋 耕 会 千 葉 支 部 展	10 . 10～10 . 15	洋 画 ・ 工 芸	80
第 41 回 千 葉 県 美 術 展 覧 会 (県展)	10 . 21～11 . 12	日本画・洋画・彫刻・工芸・書	2,285
千 葉 県 高 校 芸 術 祭「書道作品展」	11 . 15～11 . 26	書	805
第 34 回 こ ど も 県 展	11 . 28～12 . 10	絵 画	12,300
第 7 回 明 る い 社 会 づ く り ポ ス タ ー コ ン ク ル 展	12 . 12～12 . 17	ポ ス タ ー	1,192
今 日 の 美 術 を 考 え る 会 展	12 . 12～12 . 24	絵 画 ・ 立 体	21
第 25 回 登 龍 社 ・ 宮 坂 会 書 作 展	1 . 5～1 . 7	書	477
第 1 回 全 国 童 謡 書 道 展	1 . 5～1 . 7	書	2,000
第 19 回 千 葉 県 大 学 美 術 連 盟 展	1 . 5～1 . 7	洋 画 ・ デ ザ イ ン ・ 立 体	77

展 覧 会 名	期 間	作 品・種 別	展示 点数
第 17 回 富 士 百 景 写 真 展	1 . 9 ～ 1 . 15	写 真	61
第 4・ 回 橘 華 書 道 展	1 . 9 ～ 1 . 15	書	400
第 11 回 親 子 絵 画 展	1 . 9 ～ 1 . 15	洋 画 ・ 立 体	130
第17回現代書壇代表展・現代書壇巨匠展・ 千葉書壇秀抜展・千葉書壇新進展	1 . 17 ～ 1 . 21	書	330
千葉市観光絵画と写真コンクール展	1 . 23 ～ 1 . 28	日 本 画 ・ 写 真	201
第 7 回 県 医 展	1 . 23 ～ 1 . 28	絵 画 ・ 工 芸 ・ 書 ・ 写 真	104
第23回千葉県老人クラブ作品展	1 . 23 ～ 1 . 28	絵画・彫刻・工芸・書・写真	305
群 鷗 書 人 展	1 . 30 ～ 2 . 4	書	60
第 5 回 書 星 選 抜 展	1 . 30 ～ 2 . 4	書	267
第42回千葉県小中高校書初展	1 . 30 ～ 2 . 4	書	892
千 葉 市 小 中 養 護 学 校 書 写 展	1 . 30 ～ 2 . 4	書	1,490
第 23 回 千 葉 大 学 学 生 書 道 展	2 . 6 ～ 2 . 12	書	75
千 葉 大 学 美 術 科 卒 業 制 作 展	2 . 6 ～ 2 . 12	日 本 画 ・ 洋 画 ・ 彫 刻	39
第 21 回 千 葉 市 民 美 術 展	2 . 6 ～ 2 . 25	日本画・洋画・彫刻・デザイン・工芸・書・写真	1,148
第 15 回 千 葉 県 民 写 真 展	2 . 14 ～ 2 . 25	写 真	324
幕 張 北 高 校 書 道 卒 業 制 作 展	2 . 14 ～ 2 . 18	書	88
和 洋 女 子 大 学 書 道 展	2 . 20 ～ 2 . 25	書	63
第 13 回 唱 和 会 書 展	2 . 27 ～ 3 . 4	書	140
第11回千葉藍筍会かな書作展	2 . 27 ～ 3 . 4	書	55
第 38 回 書 星 教 育 部 展	2 . 27 ～ 3 . 4	書	1,211
第 15 回 子 ど も 造 形 展	2 . 27 ～ 3 . 4	洋画・彫刻・工芸・その他	900

利用状況

平成元年度入館者一覧

種別 月	開館 日数	個 人			団 体						人数合計	備 考
		一般成人	大・高生	中・小生	一般成人		大・高生		中・小生			
					人 数	団体数	人 数	団体数	人 数	団体数		
4	26	6,676	324	1,137	79	2			101	2	8,317	特別展 「房総と 近代美術」
5	26	10,597	480	1,726	336	11	33	1	256	4	13,428	
6	26	9,158	397	2,049	638	20	25	1	122	3	12,389	
7	26	8,079	221	1,966	612	13			91	2	10,969	
8	27	6,952	670	1,871	213	7			129	3	9,835	
9	26	10,669	345	2,982	777	21			486	4	15,259	特別展 「白樺派と 近代美術」
10	22	13,146	331	2,618	777	20			397	3	17,269	
11	25	13,795	788	1,751	932	28	200	2	338	4	17,804	特別展 「ドイツ・ロマン派 19世紀絵画展」
12	21	16,490	538	9,662	821	20			229	3	27,740	
1	23	9,599	355	1,233	444	15					11,631	
2	24	15,465	873	2,207	299	10			43	1	18,887	
3	4	3,005	69	1,076					28	1	4,178	
計	276	123,631	5,391	30,278	5,928	167	258	4	2,220	30	167,706	

開館以来 総開館日数4,458日 総入館者数2,495,059人

地域別入館者数

(人)

種別 月	開館 日数	県内		県外		外国
		千葉市	県内	東京都	他県	
4	26	4,063	3,312	453	471	18
5	26	5,731	6,449	613	614	21
6	26	5,714	5,924	435	293	23
7	26	5,746	4,251	533	415	24
8	27	3,974	4,588	437	764	72
9	26	9,139	5,352	339	356	73
10	22	8,522	7,614	607	515	11
11	25	7,195	9,505	451	627	26
12	21	6,743	20,079	459	447	12
1	23	5,258	5,817	301	245	10
2	24	10,840	7,037	393	586	31
3	4	2,065	1,935	108	70	0
計	276	74,990	81,863	5,129	5,403	321
		156,853		10,532		

作家名	作 品 名	出 陳 展 覧 会 名	会 期 ・ 展 示 会 場	貸 出 先
不破 章 〃	二 女 台 湾 の 農 家	「小堀進と昭和の水彩画家」展	元．４．８～４．２３ 茨城県近代美術館	茨城県近代美術館
鶴田 吾郎	初 秋	「生誕100年記念中村崋・中原悌二郎と友人たち展」	元．４．８～５．７ 福島県立美術館 元．５．１３～６．１１ 練馬区立美術館	生誕 100 年記念中村崋・中原悌二郎と友人たち展実行委員会
都鳥 英喜 白龍幾之助	巴里郊外サンクール海	「印象派と近代日本絵画展」	元．４．１５～５．１４ 長野県信濃美術館	長野県信濃美術館
石井 柏亭	病 児	「名作にみる世界の子供たち展」	元．８．５～８．２７ 茨城県近代美術館 元．９．１～９．２４ 大分県立芸術会館 元．１０．７～１１．５ いわき市立美術館	美術館連絡協議会
秋山 逸生 〃 〃	蕾 芝 山 象 嶺 額 カンナ芝山象嶺襟飾 對 綺 黒 檀 筆 筒	「秋山逸生回顧展」	元．６．９～６．１４ 千葉そごう百貨店	(株) 千葉そごう
ギョスターヴ・クールベ	眠 る 人	「ギュスターヴ・クールベ展」	元．６．３～８．６ ブリヂストン美術館	石橋財団ブリヂストン美術館
安井曾太郎	熱 海 附 近	「日本のフォーヴィズムの一断面」展	元．７．１～８．６ 福島県立美術館	福島県立美術館
浅井 忠 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	老 母 像 フォンテンブローの夕景 パ リ 公 園 金 州 城 南 門 外 平壤大同江棟光亭 農 家 田 植 之 図 狂 女 子規居士弄丹青図 図案画稿(タチヨウ図) 図 案 画 稿 (花木) 図案画稿(木かげの女) 下 絵 「食 事」 下絵「囲碁をさす図他」 花 瓶 向 付 皿 (５点) 楊 枝 挿 (２点) 関係資料(ポスター５点)	「夏目漱石と美術」	元．７．２１～８．２７ 富士美術館	富士美術館
大須賀 喬 〃	蝶 文 黒 銅 香 炉 昆 蟲 文 飾 皿	「大須賀喬回顧展」	元．９．９～９．２４ 香川県文化会館	香川県文化会館
時田 幸彦 高森登志夫 戸田 康一	ピ サ ノ 斜 塔 作 品 化 風	「第１回 東の会展」	元．９．７～９．１２ 東武百貨店船橋店	(株)東武百貨店船橋店
	教育資料「複製名画」 45点	複製名画による美術作品展	元．９．２２～１０．８ 東庄町公民館	東庄町公民館
信田 洋 二口志保子	黄 銅 花 い ら ず 紬 織 訪 問 着	第41回 県 展	元．１０．２１～１１．１２ 千葉県立美術館	千葉県美術会
東山 魁夷 富取 風堂 浅井 忠 石橋 武活 〃 小堀 進 ジャン＝バティスト＝カミユ・フロー	門 群 魚 婦 人 像 筑 波 遠 望 白 鷺 の いる 風景 霞 ケ 浦 フォンテンブローの風景	開館十周年記念特別美術展	元．１１．２１～１２．３ 千葉県立大利根博物館	千葉県立大利根博物館

作家名	作 品 名	出陳展覧会名	会 期 ・ 展 示 会 場	貸 出 先
ギョースター・グールベ 香取 秀真 香取 正彦 津田 信夫 鈴木 治平	雪 の 中 の 小 鹿 笑 獅 子 香 炉 朧 銀 玉 錯 花 瓶 北 辺 夜 猫 子 詩 湿 原 の 詩	開館十周年記念特別美術展	元.11.21～12.3 千葉県立大利根博物館	千葉県立大利根博物館
小暮 青風	天 麟	市川の作家展シリーズ「小暮青風書展」	元.11.22～12.4 市川市文化会館	市川市教育委員会
香取 正彦 香取 秀真 〃	金 銅 魚 藍 観 音 靈 獸 文 大 花 瓶 菊 文 釜	特別展「香取正彦遺作展」	元.11.21～12.17 佐倉新町資料館	佐倉市教育委員会
五十嵐 幹	華	五十嵐幹日本画作品展	元.12.11～12.25 千葉市文化センター	五十嵐幹作品展後援会
河合 新蔵 中林 儼 〃 石井 柏亭 後藤 工志 石川 欽一郎	春 の 日 け し の 花 山 中 湖 附 近 舟 に 居 る 人 タ リ ア 水 辺	「河上左京と水彩画」展	2.1.5～2.11 山口県立美術館	山口県立美術館
浅井 忠 〃	薬 屋 根 平 城 大 仏 鐘 楼	「近代洋画の創始期」	2.1.12～2.18 石巻文化センター	石巻文化センター
東山 魁夷 渡辺 学 後藤 純男	春 雪 夜 明 け 山 門 雨 後	「現代日本画巨匠展」	2.1.13～3.4 茨城県近代美術館	茨城県近代美術館
信田 洋	黄 銅 花 い ら ず	千葉市民美術展覧会	2.2.6～2.25 千葉県立美術館	千葉市美術協会
浅井 忠 〃 〃 松岡 寿	溪 流 曳 舟 通 り 沢 入 駅 森 と 小 川	「川上冬崖とその周辺」展	2.2.24～3.25 長野県信濃美術館	長野県信濃美術館

千葉県立美術館友の会(葉美会)

1. 目 的

“みる・かたる・つくる”という美術館活動に積極的に協力し、楽しいふんい気のなかで、教養を豊かにし、美術文化の向上をはかり会員相互の親睦を深める。

2. 組 織

(1)会員数 個人会員724名 賛助会員7名

(2)役 員 参与5名 会長1名 副会長3名 監事3名 理事若干名

3. 事 業

(1)友の会だより“しおさい”の発行、年4回。各1000部印刷し、会員に配布した。

(2)第14回葉美会展の開催

会 期 平成元年9月12日(火)～9月17日(日) 出 品 者 38人 展示点数 65点

(3)館事業への協力

館に協力して、特別展等の図録販売・実技講座の開催のほか、講演会・語る会など県民アトリエ事業に積極的に参加した。

4. 平成元年度 友の会実技講座

講 座 名	期 日	日数	定員	講 師
日本画入門講座	9月20・21・22・26・27・28・29日 (水) (木) (金) (火) (水) (木) (金)	7	25	五十嵐 幹
洋画入門講座 (1)	5月10・11・13・14・16・17日 (水) (木) (土) (日) (火) (水)	6	30	日和田利正
洋画入門講座 (2)	7月12・13・14・18・19・20日 (水) (木) (金) (火) (水) (木)	6	30	熊谷 文利
洋画入門講座 (3)	12月13・14・16・17・19・20日 (水) (木) (土) (日) (火) (水)	6	30	松沢 茂雄
デッサン入門講座(1)	4月26・27・28日 (水) (木) (金)	3	30	五十嵐光昭
デッサン入門講座(2)	8月2・3・4日 (水) (木) (金)	3	30	根岸 茂行
彫塑入門講座	11月15・16・17・18・19・21・22日 (水) (木) (金) (土) (日) (火) (水)	7	20	鈴木 徹
版画入門講座	11月29・30/12月1・5・6・7・8日 (水) (木) (金) (火) (水) (木) (金)	7	30	牛玖 健治
陶芸入門講座	7月25・26・27・/8月22・31日 (火) (水) (木) (火) (木)	5	30	鎗田 和平
金工入門講座	9月7・8・9・12・13・14日 (木) (金) (土) (火) (水) (木)	6	20	小林 正利
書芸入門講座	8月8・9・10・11日 (火) (水) (木) (金)	4	30	宮負 丁香
てん刻入門講座	12月15・16・17日 (金) (土) (日)	3	30	鈴木 知秋

収 集 事 業

資料収集については、日本画2点、洋画37点、彫刻9点、工芸2点、書1点、を新たに収蔵した。

特に基金によりフォンタネージなど13点を購入した。

収 蔵 資 料

平成元年度収蔵資料一覧

日 本 画

※印 基金購入

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材質・形状	寸法(縦×横cm)	受入方法
1	五十嵐 幹	紅 粧	昭和50	紙 ・ 着 彩	220.0×180.0	購 入
2	〃	か く れ ん ぼ	昭和58	紙 ・ 着 彩	91.0× 72.8	購 入

洋 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材質・形状	寸法(縦×横cm)	受入方法
1	フォンタネージ	木 立	1868～72頃	キャンバス・油彩	24.5× 35.5	※購 入
2	〃	池 と 樹 木	1870～72頃	板 ・ 油 彩	33.0×36.0	※購 入
3	〃	牛 を 追 う 農 婦	不 詳	キャンバス・油彩	47.0× 61.0	※購 入
4	〃	森 の 空 地 の 農 婦	不 詳	キャンバス・油彩	23.0× 38.0	※購 入
5	〃	水 汲 み 場 風 景	1863頃	板 ・ 油 彩	23.7× 30.7	※購 入
6	〃	風 景 ー 1	不 詳	紙・木炭・パステル	35.0× 27.3	※購 入
7	〃	風 景 ー 2	不 詳	紙・木炭・パステル	23.0× 16.0	※購 入
8	〃	川 辺 の 二 頭 の 牛	不 詳	板 ・ 油 彩	30.5× 40.6	※購 入
9	〃	羊 飼 い の 少 女	不 詳	板 ・ 油 彩	31.5× 20.5	※購 入
10	ドービニー	ヴァルモンドワの小川	1847	キャンバス・油彩	116.8× 91.4	※購 入
11	ディーズ	森 の 中 の 農 婦	1868	キャンバス・油彩	32.0× 43.5	※購 入
12	ジャック	森 の 中	1871	キャンバス・油彩	76.8× 65.3	※購 入
13	ルソー	バルビゾン の 農 場	不 詳	キャンバス・油彩	33.4× 55.5	※購 入
14	コラン	田 園 詩	1903	キャンバス・油彩	57.1×273.0	購 入
15	ローランス	カルカッソヌの幽閉者の解放	不 詳	キャンバス・油彩	55.1× 69.0	購 入
16	ワーグマン	松 島 風 景	1889	紙 ・ 水 彩	23.1× 45.5	購 入
17	笹岡了一	孟 母 の 家	昭和48	キャンバス・油彩	181.1×227.3	購 入
18	間部時雄	川 沿 い の 家	不 詳	キャンバス・油彩	63.5× 79.0	購 入
19	〃	寒 林	不 詳	紙 ・ 水 彩	46.0× 36.6	購 入
20	〃	田 中 の 牧 場	不 詳	紙 ・ 水 彩	25.5× 46.0	購 入
21	五百城文哉	日 光	不 詳	紙 ・ 水 彩	64.0× 39.0	購 入
22	足立源一郎	津久波山(水郷中州)	昭和30	板 ・ 油 彩	22.0× 27.3	購 入
23	〃	水郷初夏(十二橋)	昭和30	板 ・ 油 彩	22.0× 27.3	購 入
24	〃	水郷初夏(中州)ー1	昭和30	板 ・ 油 彩	22.0× 27.3	購 入
25	大野隆徳	公 園	明治45	キャンバス・油彩	33.5×175.0	購 入
26	今関啓司	浅 春 山 路	昭和18	キャンバス・油彩	72.8×100.0	購 入
27	笹岡了一	天使とヤコブの闘い	昭和50	キャンバス・油彩	130.3×163.0	寄 附
28	〃	山 西	昭和59	キャンバス・油彩	194.0×130.0	寄 附
29	大久保作次郎	庭 の 木 陰	大正 5	キャンバス・油彩	186.0×160.0	寄 附
30	〃	海 水 浴 帰 り	大正 6	キャンバス・油彩	188.0×162.0	寄 附
31	〃	山 へ	昭和15	キャンバス・油彩	145.0×112.0	寄 附
32	〃	ヤ ッ ホ ー	昭和24	キャンバス・油彩	179.0×146.0	寄 附
33	〃	お 茶 ど き	昭和25	キャンバス・油彩	180.0×148.0	寄 附
34	〃	風	昭和30	キャンバス・油彩	151.0×117.0	寄 附
35	足立源一郎	水郷初夏(中州)ー2	昭和30	板 ・ 油 彩	22.0× 27.3	寄 附
36	〃	水郷初夏(中州)ー3	昭和30	板 ・ 油 彩	22.0× 27.3	寄 附
37	前嶋実	九 十 九 里 初 夏	昭和63	キャンバス・油彩	112.0×162.0	寄 附

彫 刻

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材質・形状	寸法(縦×横cm)	受入方法
1	陰 里 寿 朗	構造上の森(街かもしれない)	昭和63	鉄・ステンレス	80.0×80.0×高さ200.0	購 入
2	高 村 光太郎	裸 婦 座 像	大正5頃	ブ ロ ン ズ	27.5×14.5×14.0	※購 入
3	"	薄 命 児 男 子 頭 部	明治38	"	21.0×15.4×18.0	※購 入
4	"	大 倉 喜 八 郎 の 首	大正15	"	14.5×9.8×12.0	※購 入
5	"	猪	明治38頃	"	15.0×24.0×13.0	※購 入
6	"	十和田裸婦像のための中型試作	昭和28	"	112.0×62.5×36.5	※購 入
7	"	十和田裸婦像のための「手」	昭和27	"	44.0×14.0×18.5	※購 入
8	"	野 兎 の 首	昭和20～27	"	10.2×8.9×9.8	※購 入
9	"	手	大正7	"	39.0×28.7×15.2	※購 入

工 芸

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材質・形状	寸法(縦×横cm)	受入方法
1	宮 田 宏 平	生 命 の 透 間 風	昭和57	蠟 型 鋳 白 銅	22.7×22.7×高さ37.2	購 入
2	香 取 秀 真	千本松文釜及び鳳凰文風炉	不 詳	鋳 金	釜 径24.3 高15.0 風炉径34.2 高18.8	購 入

書

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材質・形状	寸法(縦×横cm)	受入方法
1	千代倉 桜 舟	宗 左 近 の 詩	昭和63	屏風・六曲一隻	176.7×480.0	寄 附



フォンタネージ「牛を追う農婦」



ルソー(テオドール)「バルビゾンの農場」

収蔵資料一覧

(平成2年3月31日現在)

種別	区分	保管換	購 入	寄 附	合 計
日 本	画	24	95	112	231
洋	画	36	281	326	643
彫	刻	10	74	24	108
工	芸	9	78	41	128
書		14	15	42	71
版	画	3	85	49	137
合	計	96	628	594	1,318
研 究 資 料		73	128	1,218	1,419

管 理 運 営

本館では県民のための開かれた明るい美術館をめざし「みる・かたる・つくる」をモットーとして、総合的、かつ動的な美の広場を目標として展示・普及活動を行っている。

協議会では美術館の運営及び展示資料の方向性について協議した。

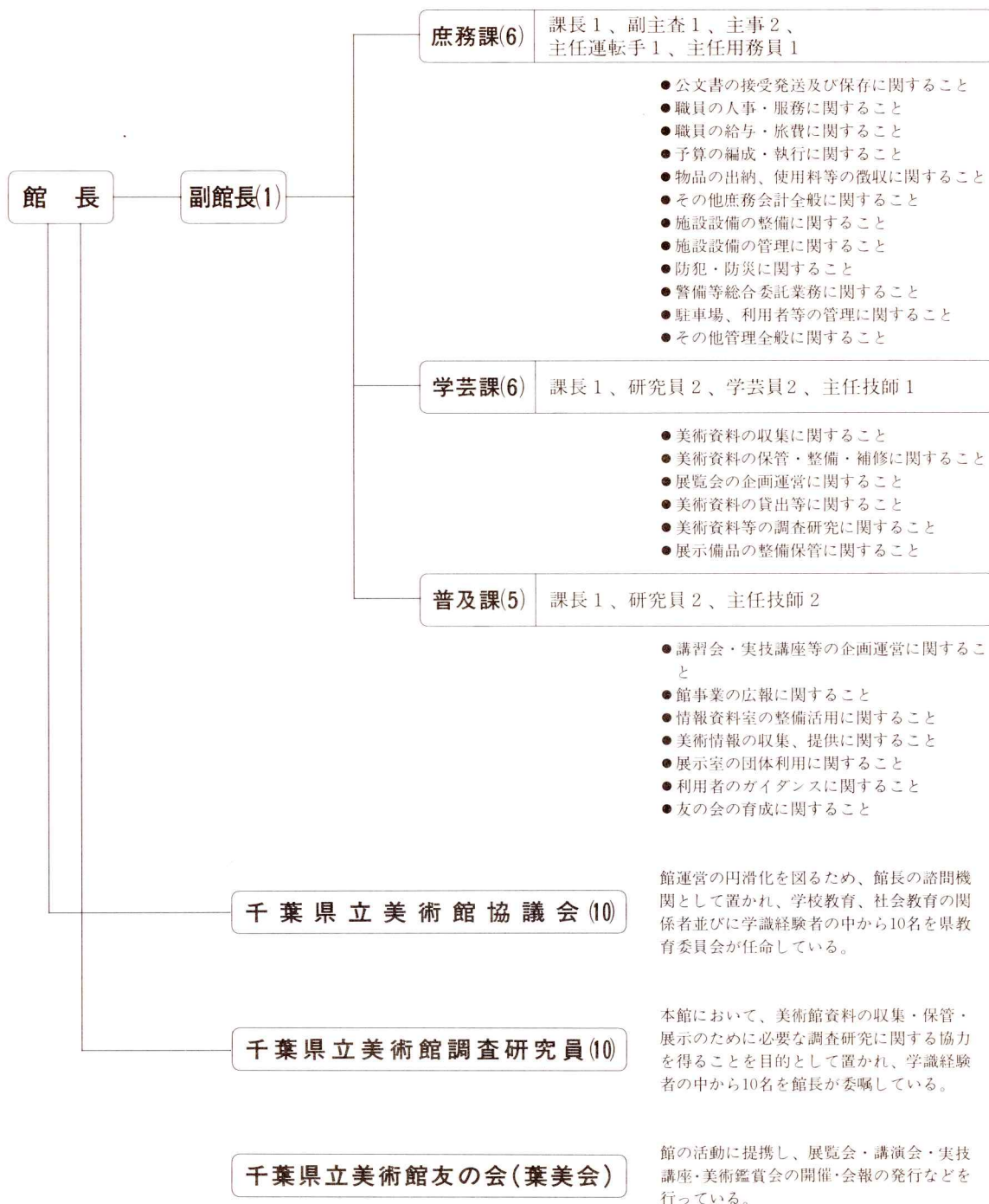
美術館調査研究員は、広報・普及について研究を行った。

運 営 方 針

- 県民のための美術館として、明るく親しまれる美術館。
- 学校教育・社会教育との関連から、教育普及活動を重視し、楽しく学べる美術館。
- 県民と美術家との交流の広場とし、相互の理解と向上を図る美術館。
- 房総の地にかかわりのある作家の作品と、関係資料の収集と研究をめざす美術館。
- 美の広場として、広く美術資料・情報等を収集し、みる・かたる・つくる活動を総合的に展開する美術館。

機 構

組織及び事務分掌 (2.3.31現在)



職 員

館 長	竹 内 一 雄
副 館 長	小 池 賢 博
庶務課	
庶務課長	高 浦 英 一
副 主 査	加 藤 貞 美 治
主 事	渡 辺 和 子
〃	豊 田 浩 昌
主任運転手	篠 原 恒 雄
主任用務員	長 島 則 子

学芸課	
学芸課長	米 田 耕 司
研 究 員	中 地 昭 男
学芸員	大 久 保 守 浩
研 究 員	田 坂 公 秀
学芸員	前 川 順 子
主任技師	相 川 順 子
普及課	
普及課長	小 野 禮 子
研 究 員	鈴 木 喜 久 夫
〃	池 田 伊 予
主任技師	金 田 雅 成
〃	小 泉 幸 代

千葉県立美術館協議会委員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
池 田 知 之 (元. 6. 20辞職)	千葉県高等学校教育研究会 美術工芸部会長	戸 田 楨 佑	東京大学教授
垣 畑 利 光 (元. 6. 21~)	千葉県高等学校教育研究会 美術工芸部会長	富 山 秀 男	国立近代美術館次長
遠 藤 健 郎	画 家	野 口 貞 子	千葉県婦人グループ連合会役員
大 高 好 男	N H K千葉放送局長	長谷川 昂	千葉県美術会会長
郡 司 幹 雄	千葉県文化財保護審議会委員	若 桑 みどり	千葉大学教養学部教授
鈴 木 民 三	千葉県立美術館友の会会長	(五十音順、敬称略)	

美術館調査研究員

氏 名	勤 務 先 等	氏 名	勤 務 先 等
石 倉 総 子	千葉市立こてはし台中学校教諭	高 木 正	大栄町立桜田小学校教頭
大須賀 久 大	成田市立遠山中学校教諭	羽 生 智 樹	千葉県立八千代高等学校教諭
岡 野 重 義	千葉県立佐倉高等学校教諭	平 戸 美和子	千葉市立さつきが丘東小学校教頭
加曾利 和 夫	千葉市立高洲第二中学校教頭	南 隆 一	横芝町立横芝中学校教諭
倉 次 和 也	佐倉市立印南小学校教頭	綿 貫 啓 一	船橋市企画部情報管理課副主査

予算概要

(単位：千円)

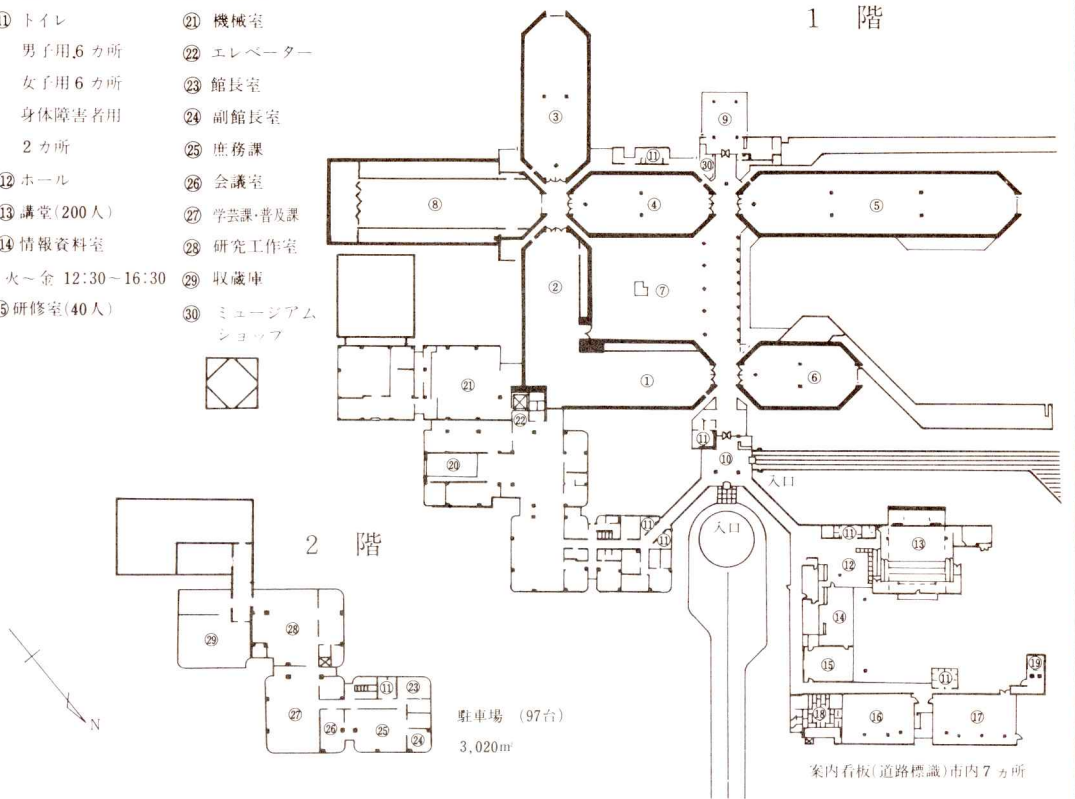
事 業 名	予算額	事 業 概 要
運 営 費	66,716 3,696 3,420 131,226	特別展3、企画展2、常設収蔵作品展 実技講座・講演会の実施等、館報・年報・事業案内等の発行 資料調査、研究員会議等 施設管理、設備・機械保守委託、その他運営費
施設整備費	50,100 6,695 32,500 (197,000)	美術資料、美術図書、展示用備品、視聴覚備品、図書備品 作品修復、展示室空調機改修設計 展示室空調機改修工事、警備員室空調機改修工事、駐車場車止め工事
合 計	294,353	(債務負担197,000)

注) ○職員の人件費は含まない。 ○別に資料購入のための基金20億円。

施設

内容

- | | |
|-----------------|-----------|
| ①～⑧ 展示室 | ⑮～⑰ 実技室 |
| ⑨ 食堂(44席) | ⑱ 室 場 |
| ⑩ 玄関ホール | ⑳ 搬出入口 |
| ⑪ トイレ | ㉑ 機械室 |
| 男子用 6 カ所 | ㉒ エレベーター |
| 女子用 6 カ所 | ㉓ 館長室 |
| 身体障害者用 | ㉔ 副館長室 |
| 2 カ所 | ㉕ 庶務課 |
| ⑫ ホール | ㉖ 会議室 |
| ⑬ 講堂(200人) | ㉗ 学芸課・普及課 |
| ⑭ 情報資料室 | ㉘ 研究工作室 |
| 火～金 12:30～16:30 | ㉙ 収蔵庫 |
| ⑮ 研修室(40人) | ㉚ ミュージアム |
| | ショップ |



敷地	33,058㎡
建物	10,664㎡
展示棟	6,343㎡
管理棟	2,819㎡
県民アトリエ	1,502㎡

外壁は常滑焼の特殊煉瓦仕上げ
 屋根は天然スレートの3枚重葺
 内装の壁面は布張り塗装仕上げ、化粧合板
 天井は岩綿吸音板張り
 床はビニールタイル張り(一部御影石・ジュタン張り)
 展示棟は全室を通じ段差がない
 外気導入には4段フィルター方式を採用

沿革

千葉県立美術館は、昭和43年にまとめられた県立博物館設置構想に基き、建設計画をすすめ、昭和48年4月教育庁文化課に美術館準備班を置き、開館事務に当たった。同49年3月第1期工事の展示棟が完成し、4月1日千葉県立美術館として機関設置し、10月23日開館式を挙げ、一般公開を始めた。同51年2月に第2期工事の管理棟が、同55年2月に第3期工事の県民アト

リエ棟、更に同63年8月に増築工事の展示棟及び収蔵庫が完成した。

平成2年度主要事業

企画展

常設収蔵作品展

- I 4月1日(日)～7月15日(日)
- II 7月17日(火)～10月14日(日)
- III 11月17日(土)～12月24日(月・祝)
- IV 2月16日(土)～3月31日(日)

本館が所蔵する日本画・洋画・彫刻・工芸・書・版画の作品を4期にわけて順次展覧するほか、新たに収蔵された作品を紹介します。

房総の美術家シリーズ(20) 鈴木方鶴展

9月13日(木)～10月14日(日)

鈴木方鶴(1918～1985)は、香取郡山田町に生まれ、千葉師範学校在学中に浅見喜舟に学びました。昭和24年から定年まで県立千葉女子高校に勤務するかたわら書に打ち込み、無心会理事、県美術会常任理事、日本書道美術院審査員などをつとめました。本展では、鈴木方鶴の作品を一堂に展覧し、その足跡を回顧します。

浅井 忠記念賞展

1月6日(日)～2月11日(日)

昭和58年度に美術館開設記念事業として、本県出身の日本近代洋画の先駆者である浅井忠の顕彰と現代美術の振興に寄与するため全国公募による「浅井忠記念賞展」を開催し、全国で初のこころみとして、多大な評価を得ました。本展は、その第2回展として開催します。

第14回千葉県移動美術館

八日市場市立公民館

11月20日(火)～12月2日(日)

栄町役場町民ギャラリー

12月5日(木)～12月18日(火)

優れた美術作品を、より多くの県民の方々に鑑賞していただくため、本館所蔵作品を中心とした展覧会を2会場で開催します。

特別展

石井林響をめぐる画家たち

6月9日(土)～7月15日(日)

明治以降、現代に至る日本画の流れの中で、日本画の革新を目指すさまざまな絵画運動が実践されました。特に明治後半から昭和初期にかけては、日本美術院の創設、各種団体による小会派分立、文展、帝展の開設を背景に、日本画の開拓が多様に試みられました。

本県出身の石井林響(1884～1930)の画業はこの時代と重なります。本展では、近代日本画の革新に努力した当時の東京画壇における青年画家の作品を、石井林響を中心に展覧し、彼等の果たした役割を再認識します。

マリー・ローランサン

2月16日(土)～3月24日(日)

マリー・ローランサンは、今世紀が生んだ最も優れた女流画家として、そのパステルカラーと柔らかな曲線に託された夢見るような詩情の世界は、近代感覚のひとつの典型といえます。

ブラックやピカソ、詩人アポリネールらの影響を受けつつ、女性特有の感覚で独自の画風をつくりあげ、その才能は様式やイズムを越えた自由な芸術家としての地位を占めております。

本展では、激動する今世紀初頭の近代絵画の流れの中で生まれ、多くの人々の心をひきつけるマリー・ローランサンの作品を展覧します。

講演会 特別展、企画展に関連し、年5回開催

実技講座

No.	講座名	開 設 日	日数	定員	講 師
1	日本画講座	6月19日・20日・21日・23日・24日・28日・29日・30日 (火) (水) (木) (土) (日) (木) (金) (土) 7月1日・3日・4日・6日 (日) (火) (水) (金)	12(8)	20	斉藤 惇氏
2	洋画講座1	5月8日・9日・10日・11日・17日 (火) (水) (木) (金) (木) 18日・19日・22日・23日・24日 (金) (土) (火) (水) (木)	10(7)	30	熊谷 文利氏
3	洋画講座2	8月28日・29日・30日・31日 (火) (水) (木) (金) 4日・5日・6日・7日・8日・9日 (火) (水) (木) (金) (土) (日)	10(7)	30	小林 数氏
4	版画講座1	5月23日・24日・26日・27日・29日・30日・31日 (水) (木) (土) (日) (火) (水) (木) 6月2日・3日・6日・7日・8日 (土) (日) (水) (木) (金)	12(7)	20	増田 陽一氏
5	版画講座2	11月27日・28日・29日 (火) (水) (木) 12月1日・2日・4日・5日・6日・7日・11日・12日・13日 (土) (日) (火) (水) (木) (金) (火) (水) (木)	12(7)	20	牛玖 健治氏
6	彫刻講座	11月3日・4日・6日・8日・10日・11日 (土) (日) (火) (木) (土) (日) 13日・14日・17日・18日・20日・23日 (火) (水) (土) (日) (火) (金)	12(8)	15	酒井 良氏
7	陶芸講座1	6月12日・13日・14日・7月19日・20日・21日・22日 (火) (水) (木) (水) (金) (土) (日) 8月26日・9月14日 (日) (金)	9(5)	30	明石 昇氏
8	陶芸講座2	10月23日・24日・25日・11月20日・21日・22日・23日 (火) (水) (木) (火) (水) (木) (金) 12月18日・1月11日 (火) (金)	9(5)	30	鎗田 和平氏
9	書芸講座1	9月19日・20日・22日 (水) (木) (土)	3(3)	25	高木 東扇氏
10	書芸講座2	11月27日・28日・29日 (火) (水) (木)	3(3)	25	中村 象閣氏

()は講師指導日数

平成2年度職員

館 長 竹 内 一 雄

副 館 長 佐 久 間 芳 夫

” 小 池 賢 博

庶務課

庶 務 課 長 高 浦 英 一

副 主 査 加 藤 貞 美 治

主 事 渡 辺 和 子

” ” 豊 田 浩 昌

主任運転手 篠 原 恒 雄

主任用務員 長 島 則 子

学芸課

学 芸 課 長 米 田 耕 司

学 芸 員 大 久 保 守

研 究 員 田 坂 浩

学 芸 員 前 川 公 秀

主任技師 金 田 雅 成

技 師 中 松 彰 久

普及課

普 及 課 長 小 野 禮 子

研 究 員 鈴 木 喜 久 夫

研 究 員 神 尾 吉 夫

学 芸 員 藤 川 正 司

研 究 員 中 村 博 史

主 任 技 師 相 川 順 子

利用案内

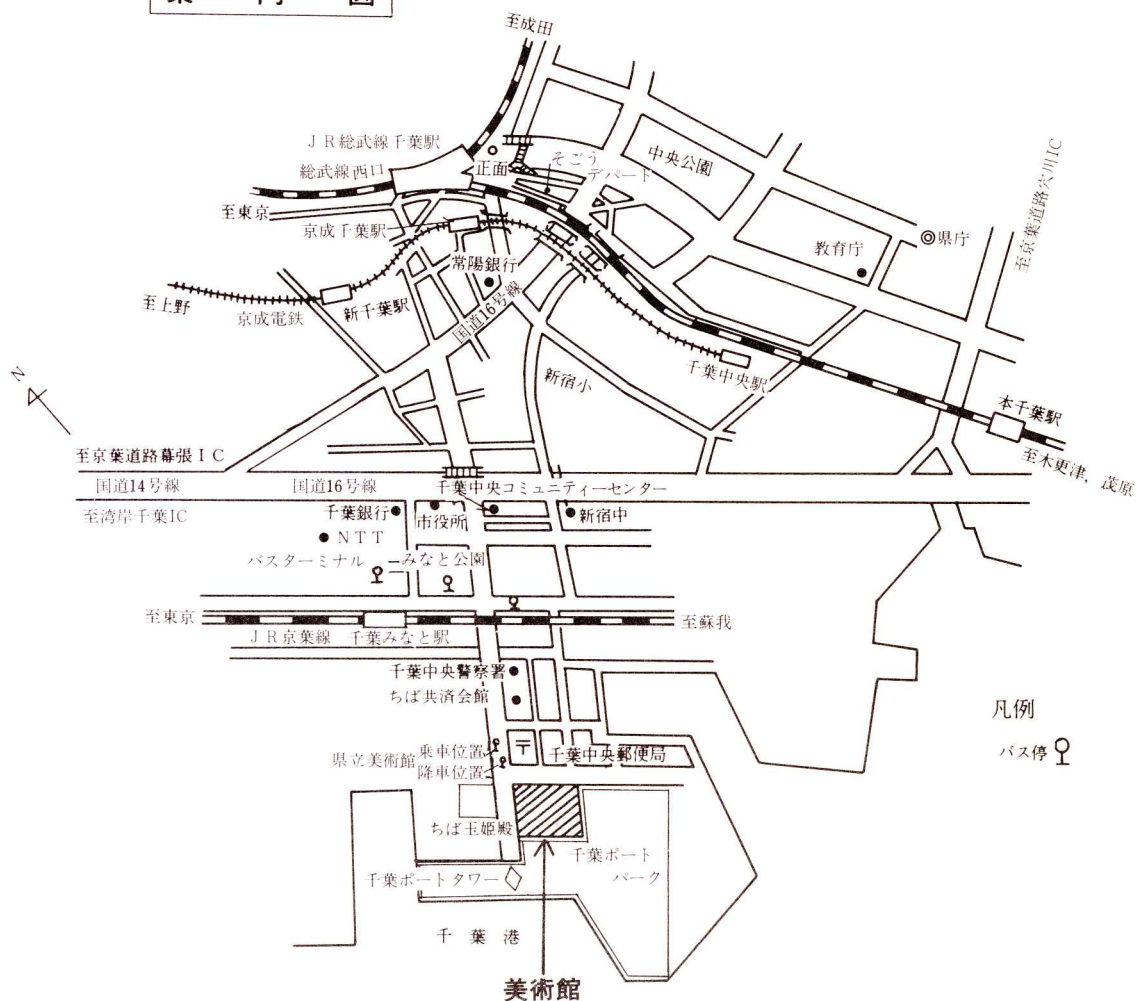
開館時間

- 開館時間** 午前9時から午後4時30分まで
- 休館日** ・月曜日（ただし、月曜が祝日のときは開館し、翌日休館）
・年末年始（12月26日～1月4日）
・展示替え等のため、必要があるとき。
- 観覧料** ・無料（ただし、特別展は有料）
- 団体観覧** ・団体で来館されるとき、あらかじめ御連絡いただければ館の概要や作品等の解説をいたします。

交通

- ★ J R 総武線千葉駅下車
● 徒歩23分。
● バス⑩番(千葉そごう前)のりばから
「千葉ポートタワー」行にて15分、
「県立美術館前」下車、徒歩1分。
- ★ J R 京葉線千葉みなと駅下車、徒歩8分。

案内図



千葉県立美術館年報（平成元年度）

発行 千葉県立美術館

〒260 千葉市中央港1-10-1

TEL 0472（42）8311（代表）

印刷 有限会社 正文社

